

木古内町

泉沢6遺跡

— 高規格幹線道路函館江差道工事用地内埋蔵文化財発掘調査報告書 —

平成29年度

公益財団法人 北海道埋蔵文化財センター

# 例 言

1. 本書は、国土交通省北海道開発局が行う高規格幹線道路函館江差自動車道建設工事に伴い、公益財団法人北海道埋蔵文化財センターが平成27・28年度に発掘調査を実施した、上磯郡木古内町泉沢6遺跡の埋蔵文化財発掘調査報告書（第350集）である。
2. 報告内容は、同遺跡平成27年度調査範囲1, 668㎡と平成28年度調査範囲1, 411㎡の合計3, 079㎡から検出された遺構と遺物である。
3. 本書の編集は土肥研晶が担当し、平成27年度調査の遺構の事実記載を芝田直人が、平成28年度調査の遺構の事実記載を土肥、写真図版を吉田裕吏洋が担当した。
4. 整理作業の担当は土肥が、掲載遺物の写真撮影は吉田裕吏洋がおこなった。
5. 分析について、下記に依頼・委託した。  
黒曜石産地分析 株式会社パレオ・ラボ
6. 出土遺物は木古内町教育委員会が保管する。写真などの記録類は当センターが保管する。
7. 調査・報告にあたっては、下記の諸機関および諸氏に御協力、御指導をいただいた。

北海道教育委員会  
木古内町教育委員会  
北斗市教育委員会  
知内町郷土資料館  
野村広章（木古内町教育委員会教育長）  
木元 豊（木古内町教育委員会）  
西脇対名夫（北海道教育委員会）  
工藤研二（北海道教育委員会）  
竹田 聡（知内町教育委員会）  
石井淳平（厚沢部町教育委員会）  
大沼忠春

## 記号等の説明

1. 本文中および図、表中では次の記号を用いた。遺構の種別は以下のとおり。

P：土坑      F：焼土

遺構番号は平成27年度の調査から確認した順に1号から番号を付した。

2. 掲載した遺構図等の縮尺は原則的に以下のとおりとし、図版右下に、スケールを付した。

土層断面図	1：40	遺構実測図	1：40	遺構出土遺物分布図	1：40		
遺物出土詳細図	1：20	土器実測図	1：3	土器拓影図	1：3		
剥片石器実測図	1：2	石斧	1：2	礫石器実測図	1：3	石皿	1：4

遺構平面図は方位を統一して掲載し、各図版右上に方位を示した。また、それぞれの遺構平面図には最寄りの方眼杭の位置を記した。

3. 遺構の規模は、確認できた形状の上場長軸長×短軸長、上場から坑底面までの最大深を示し、土層図、遺構図中のレベルは標高(単位m)を示し、遺構ごとに方位記号を記している。出土した遺物について、土器はIV章にすべて掲載し、出土状況図に小さい実測図と、IV章の掲載番号を示した。

4. 土器の大きさは、器高は計測可能な個体の最大高で計測、口径・底径は計測可能なもののみ、器厚は胴部の平均的な厚みで示した。石器の大きさは最大長×最大幅×最大厚で(単位mm)記し、重量はg単位で表記した。なお、破損しているものについては、( )で値を示した。石器実測図中でたたき痕はV—V、すり痕は|←→|で範囲を表した。また、自然面はドットで表現した。掲載遺物の写真は縮尺を統一していない。

5. 土層の観察には『標準土色帖』(小山・竹原 1977)および『土壌調査ハンドブック』(ペドロジスト懇談会1984)を用いている。また、火山灰について以下の略号を用いている。火山灰は層位的な検出状況と外見から判断しており、分析による同定は行なっていない。

B-Tm：白頭山 - 苫小牧火山灰(10世紀降下)

# 目 次

例 言	
記号等の説明	
目 次 挿図・表・図版	
I 諸 言	
1. 調査要項	1
2. 調査体制	1
3. 調査に至る経緯	2
4. 調査範囲とグリッドの設定	2
5. 調査の方法	2
6. 土層	3
7. 整理の方法	3
(1) 記録と保管	3
(2) 遺物の分類	3
8. 調査結果の概要	4
II 遺跡の位置と環境	7
1 地形・地質	7
2 地名	7
3 周辺の遺跡	9
III 遺構	13
IV 遺物	21
V 自然科学的分析	
1 泉沢6遺跡出土黒曜石製石器の産地推定	37

# 挿図目次

図 I - 1 調査区設定図	6
図 I - 2 調査区内の土層図	6
図 II - 1 遺跡の位置と木古内町の地形	8
図 II - 2 木古内町周辺の地質	8
図 II - 3 木古内町内周辺の遺跡	10
図 III - 1 遺構位置図	13
図 III - 2 P-1・F-1～3平面図・断面図	17
図 III - 3 F-4～7平面図・断面図	18
図 III - 4 F-8～10平面図・断面図	19
図 III - 5 F-11～14平面図・断面図	20
図 IV - 1 包含層出土土器分布図	22
図 IV - 2 土器実測図(1)	25
図 IV - 3 土器実測図(2)	26

図Ⅳ－４	土器実測図（３）	27
図Ⅳ－５	石器実測図（１）	28
図Ⅳ－６	石器実測図（２）	29
図Ⅳ－７	石器実測図（３）	30
図Ⅳ－８	石器実測図（４）	31
図Ⅳ－９	石器実測図（５）	32
図Ⅳ－10	石器実測図（６）	33
図Ⅴ－１	黒曜石原産地分布図（東日本）	37
図Ⅴ－２	黒曜石産地推定判別図（１）	39
図Ⅴ－３	黒曜石産地推定判別図（２）	39
図Ⅴ－４	黒曜石産地推定判別図（３）	40

## 表 目 次

表Ⅰ－１	検出遺構一覧	5
表Ⅰ－２	出土土器一覧	5
表Ⅰ－３	出土石器一覧	5
表Ⅱ－１	木古内町の遺跡一覧	11
表Ⅳ－１	掲載土器一覧	34
表Ⅳ－２	掲載石器一覧	35
表Ⅴ－１	分析対象	37
表Ⅴ－２	東日本黒曜石産地の判別群	38
表Ⅴ－３	測定値および産地推定結果	40

## 図版目次

図版Ⅴ－１	黒曜石製石器原材料産地分析資料	40
図版 1	平成27年度の調査（１）	図版14 F－ 8（１）
図版 2	平成27年度の調査（２）	図版15 F－ 8（２）
図版 3	平成27年度の調査（３）	図版16 F－ 7・ 9・ 11
図版 4	平成27年度の調査（４）	図版17 F－12・ 13・ 14
図版 5	平成27年度の調査（５）	図版18 土器（１）
図版 6	平成28年度の調査（１）	図版19 土器（２）
図版 7	平成28年度の調査（２）	図版20 土器（３）
図版 8	平成28年度の調査（３）	図版21 土器（４）
図版 9	平成28年度の調査（４）	図版22 土器（５）・ 石器（１）
図版10	P－ 1（１）	図版23 石器（２）
図版11	P－ 1（２）	図版24 石器（３）
図版12	F－ 1・ 2・ 3	図版25 石器（４）
図版13	F－ 4・ 5・ 6	図版26 石器（５）

# I 諸 言

## 1. 調査要項

事業名：高規格幹線道路函館江差自動車道工事用地内埋蔵文化財発掘調査

委託者：国土交通省北海道開発局函館開発建設部

遺跡名：泉沢6遺跡（北海道教育委員会登録番号B-05-61）

所在地：上磯郡木古内町字二乃岱4-94、4-181、4-191、4-194、4-204、4-207番地

調査面積：3,079m<sup>2</sup>

発掘期間：平成27年7月1日～平成27年7月17日

平成28年6月6日～平成28年6月21日

整理期間：平成29年4月3日～平成30年3月31日

## 2. 調査体制

平成27年度	理事長	越田 賢一郎
	副理事長	中田 仁
	事務局長	山田 寿雄（専務理事兼任）
	第1調査部長	長 沼 孝（常務理事兼任）
	第1調査部第3調査課	
	課長	土肥 研 晶
	主 査	芝田 直 人（発掘担当者）
平成28年度	主 査	直江 康 雄（発掘担当者）
	理事長	越田 賢一郎
	副理事長	中田 仁
	事務局長	山田 寿雄（専務理事兼任）
	第1調査部長	長 沼 孝（常務理事兼任）
	第1調査部第3調査課	
	課長	土肥 研 晶（発掘担当者）
主 査	吉田 裕吏洋（発掘担当者）	
平成29年度	理事長	越田 賢一郎
	副理事長	中田 仁
	事務局長	山田 寿雄（専務理事兼任）
	第1調査部長	長 沼 孝（常務理事兼任）
	第1調査部第2調査課	
	課長	土肥 研 晶（編集担当者）
	主 査	吉田 裕吏洋

### 3. 調査に至る経緯

高規格幹線道路「函館江差自動車道」は、北海道縦貫自動車道・函館新道と一体となって高速ネットワークを形成する一般国道228号の自動車専用道路で、近隣主要都市を經由し、函館港・函館空港への物流の効率化と生活の利便性を向上させる目的で、北海道開発局により整備が進められている。現在（平成30年2月）、函館IC～北斗茂辺地ICの18.0kmが供用され、北斗茂辺地IC～木古内ICの延長16.0kmの「茂辺地木古内道路」で平成31年度の供用開始をめざし事業が進められている。

平成11年、国土交通省北海道開発局函館開発建設部（以下「函館開発建設部」）は、函館江差自動車道、茂辺地木古内道路における埋蔵文化財包蔵地に関する事前協議書を北海道教育委員会（以下「道教委」）に提出した。これを受けて現地踏査を実施した道教委は、木古内町大釜谷から大平までの範囲の15地点に関して所在確認調査が必要と通知した。泉沢6遺跡における所在確認調査は平成26年11月5日～7日に実施、その結果橋呉川支流の沢頭に面する段丘上の3,410m<sup>2</sup>については発掘調査が必要、また、200mほど東側の400m<sup>2</sup>について要立会と回答した。函館開発建設部は、工事計画の変更は不可能であることから、（公財）北海道埋蔵文化財センターに発掘調査を委託した。平成27・28年度の2カ年で事業を受託した当センターは、試掘調査の結果から、調査区のおよそ半分を遺構確認範囲とし、各年とも発掘調査期間が2週間前後のタイトな調査計画を実施した。平成27年度は、工事用道路の建設に合わせ、6月30日から準備工をすすめ、7月8日から作業員22名で発掘調査着手。7月16日には調査終了した。平成28年度は5月31日より準備工開始、6月6日に作業員26名で発掘調査着手、天候不調のため6月21日に現地調査を終えた。

### 4. 調査範囲とグリッドの設定

泉沢6遺跡の調査区設定に当たっては、道路工事用地のセンター杭27600と27540を結んだ直線を基軸に調査区内に5m×5mの方眼杭を設定した。発掘区はアルファベットと数字の組み合わせで表示している。路線と平行方向に5m毎に設定されている算用数字は、SP27515を0として設定、SP27600は23にあたる。路線垂直方向に5m毎に設定しているアルファベットは基軸をHとし、調査区南端で大文字のA、調査区北端で大文字のOと設定としている。

高規格道の中心線上のSP27600とSP27540の世界測地系による座標は、平面直角座標第X I系に基づき以下の数値である。また、この軸は真北に対し39°50′55″東偏する。

SP27600 (H23)            X = -254,437.638    Y = 21,204.377

SP27540 (H11)           X = -254,403.609    Y = 21,253.793

測量の成果で得られた世界測地系に基づく平面直角座標は第X I系で次のとおりである。

D13    :    X    =   -254425.753    Y    =   21256.900

D18    :    X    =   -254439.932    Y    =   21236.310

H21    :    X    =   -254431.967    Y    =   21212.613

### 5. 調査の方法

調査区内は試掘調査の結果、予想される遺物の出土量に応じ、東西15ラインより東側を遺構確認区、西側を通常発掘区にわけて進めた。遺構確認区では、表土I層と遺物包含層を重機により遺構・遺物の有無を確認しながら薄く削り、下位層上面まで掘削、この面で遺構がなければ調査終了とした。通常発掘区では人力による包含層の掘削を行い、遺構は平面・断面の測量を行った。

## 6. 土 層

基本土層はⅠ層からⅣ層に分層した。

Ⅰ層：表土 黒褐色土植林による攪乱土層とみられる

Ⅱ層：黄褐色土 火山灰（B-Tm）混じりの黄褐色ローム層、攪乱により部分的にみられる。

Ⅲa層：黄褐色土 明るい色調の腐植の弱いローム層、縄文時代後期前葉の遺物包含層

Ⅲb層：Ⅲ層の暫移層 黄褐色ローム層 縄文時代早期の遺物包含層

Ⅳ層：にぶい黄褐色土 凝灰岩礫の混じるローム層

## 7. 整理の方法

取り上げた遺物は、現地では原則として以下の作業工程で整理を行った。遺構・包含層それぞれの「遺物取り上げ台帳」、および「土壌水洗サンプル取り上げ台帳」を作成し、これをもとに水洗、乾燥、分類、注記、点数集計等の作業を進めた。注記の内容は、泉沢6遺跡を「泉6」と略記し、その後にはグリッド名、層位の順に記した。注記するスペースのない、小さな遺物については省略した。

遺物の出土グリッド、層位、点数、分類名、日付などの情報は「遺物カード」に記録し、遺物とともにビニール袋へ入れ、収納した。カードの情報は遺構ごと、分類ごとの情報を集計し、最終的な遺物台帳を作成した。

### （1）記録と保管

現地での実測図・土器・石器などの実測図、写真などの記録は当センターにおいて保管する。遺物は報告書刊行の後、木古内町教育委員会が保管予定である。

### （2）遺物の分類

#### 土 器

土器は大きな区分である時期ごとの特徴から、便宜的に縄文時代早期に属する資料をⅠ群とし、以下順に前期をⅡ群、中期をⅢ群、後期をⅣ群、晩期をⅤ群、続縄文時代をⅥ群、擦文時代相当のものをⅦ群、とし、各群にアルファベットの小文字を組み合わせ、前半（a類）、後半（b類）、あるいは前葉（a類）、中葉（b類）、後葉（c類）に分類した。また、必要に応じて細分類（例 a-1類など）を行っている。

**Ⅰ群** 縄文時代早期に属する土器群

**a類**：貝殻条痕文、貝殻腹縁文、などが施される

**b類**：撚糸文、組紐圧痕文、絡条体圧痕文、貼付文、縄文等の施されるもの

b-1類：東釧路Ⅱ・Ⅲ式に相当するもの

b-2類：コッタロ式に相当するもの

b-3類：中茶路式に相当するもの

b-4類：東釧路Ⅳ式に相当するもの

**Ⅱ群** 縄文時代前期に属する土器群

**Ⅲ群** 縄文時代中期に属する土器群

**Ⅳ群** 縄文時代後期に属する土器群

**a類**：初頭～前葉の土器。天祐寺式・涌元式・トリサキ式・大津Ⅶ群・白坂3式に相当するもの

**b類**：中葉の土器。ウサクマイC式、手稲式、ホッケマ式併行に相当するもの

**c類**：後葉の土器。堂林式・三ツ谷式・湯の里3式に相当するもの



V群 縄文時代晩期に属する土器

VI群 続縄文時代に属する土器群

VII群 擦文時代に属する土器群

#### 石器等

石器等は以下の器種に分類した。

**石鏃**：主に両面加工で整形され、尖頭形を呈する5 cm未満のもの

**石錐**：端部に錐状の突出部が作り出されたもの

**つまみ付きナイフ**：端部にノッチ状の加工によるつまみが作り出されたもの

**ナイフ**：主に両面加工で整形され、尖頭部をもたず、直線的な刃部や柄を有するもの

**両面加工石器**：両面加工で整形され、尖頭部をもたず、直線的な刃部や柄を有しないもの

**スクレイパー**：素材の側縁・端部に連続的な剥離によって刃部が作り出されるもの

**篋状石器**：主に両面加工で左右対称形に整形され、端部に刃部が作り出されるもの

**Rフレイク**：剥片に散漫な剥離が施されるものや、使用による微細な剥離痕が認められるもの

**楔形石器**：素材の両端部に、対向する剥離や潰れが認められるもの

**石核**：剥片を剥離した痕跡が認められる、剥片石器と共通する石材のもの

**石斧**：研磨で整形された斧状の刃部を有するもの

**たたき石**：礫にたたき痕が認められるもののうち、手に持って使用されたと想定されるもの

**すり石**：礫にすり痕が認められるもののうち、手に持って使用されたと想定されるもの

**砥石**：礫にすり痕が認められるもののうち、研磨作業に使用されたと想定されるもの

**扁平打製石器**：扁平な礫の縁辺を打ち欠き、半円または楕円に整形されたもので、縁辺に擦り痕を有するもの

**石錘**：扁平な礫の縁辺に、対向する打ち欠きが認められるもの

**台石**：礫にたたき痕が認められるもののうち、置いて使用したと想定されるもの

**石皿**：礫にすり痕が認められるもののうち、置いて使用したと想定されるもの

**加工痕のある礫**：礫に散漫・不規則な加工が認められるもの

**フレイク**：石核・石器などから剥離されたもので、二次加工・使用痕が認められないもの

**原石**：石器に使用される石材の礫で、使用痕・加工痕の認められないもの

## 8. 調査結果の概要

調査の結果、縄文時代早期後半の遺構・遺物と縄文時代後期前葉の遺構・遺物が確認された。検出された遺構は土坑1基、焼土14か所で、平成27年度に検出された焼土6か所が縄文時代早期後半のコッタロ式相当、平成28年度に検出された遺構のすべてが縄文時代後期前葉の天祐寺式相当のものとみられる。(図I-1、表I-1) 遺物包含層はⅢ層(Ⅲa・Ⅲb層)とみられるが、調査区は全面削平を受けており、耕作土や表採の遺物も少なくない。検出した遺物は土器3,089点、石器類4,989点の計8,078点である(表I-2)。出土した土器は縄文時代早期後半の東鉦路Ⅲ式土器、後期前葉の天祐寺式、晩期後葉で、後期前葉が9割を占めている。石器には石鏃、石槍、石錐、スクレイパー、石斧、すり石、石錘などがあり、剥片石器の大半は頁岩を素材とするが、縄文時代早期の黒曜石製の石鏃が6点検出されたのが目立つ。それらを産地分析した結果、すべて赤井川産だった。

表 I-1 検出遺構一覧

遺構種別	件 数	時 期
土坑	1	縄文時代後期前葉
焼土	6	縄文時代早期後葉
	8	縄文時代後期前葉

表 I-2 出土土器一覧

	I 層	Ⅲa層	Ⅲb層	覆土	合 計
I 群b類	1	38	227		266
IV 群a類	63	1973	743	64	2843
V 群c類		2			2
総 計	64	2013	970	64	3111

表 I-3 出土石器一覧

	包 含 層			遺 構	合 計
	I	Ⅲa	Ⅲb	覆 土	
石鏃	1	9	3		13
石錐		5	4		9
つまみ付きナイフ		1	5		6
ナイフ	1	4	2		7
スクレイパー	1	8	8		17
楔形石器		1	1		2
ヘラ状石器		6	1		7
フレイク	20	2395	1983	4	4402
Rフレイク	1	47	18		66
石核		4	3		7
石斧	1	6	5		12
石製品			1		
たたき石		3	3		6
すり石		2	3		5
砥石		10	23		33
扁平打製石器					
石鋸					
石錘		1	3		4
原石			2		2
台石	11				11
石皿	3		1		4
凹み石		2			2
礫	3	227	140	4	374
総 計	42	2731	2209	8	4990

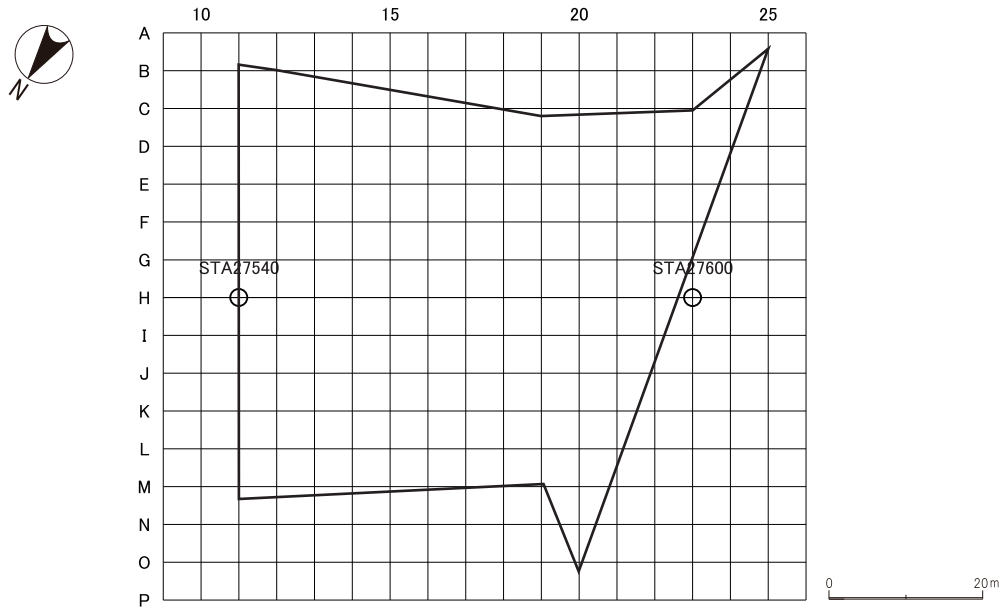


図 I - 1 調査区設定図

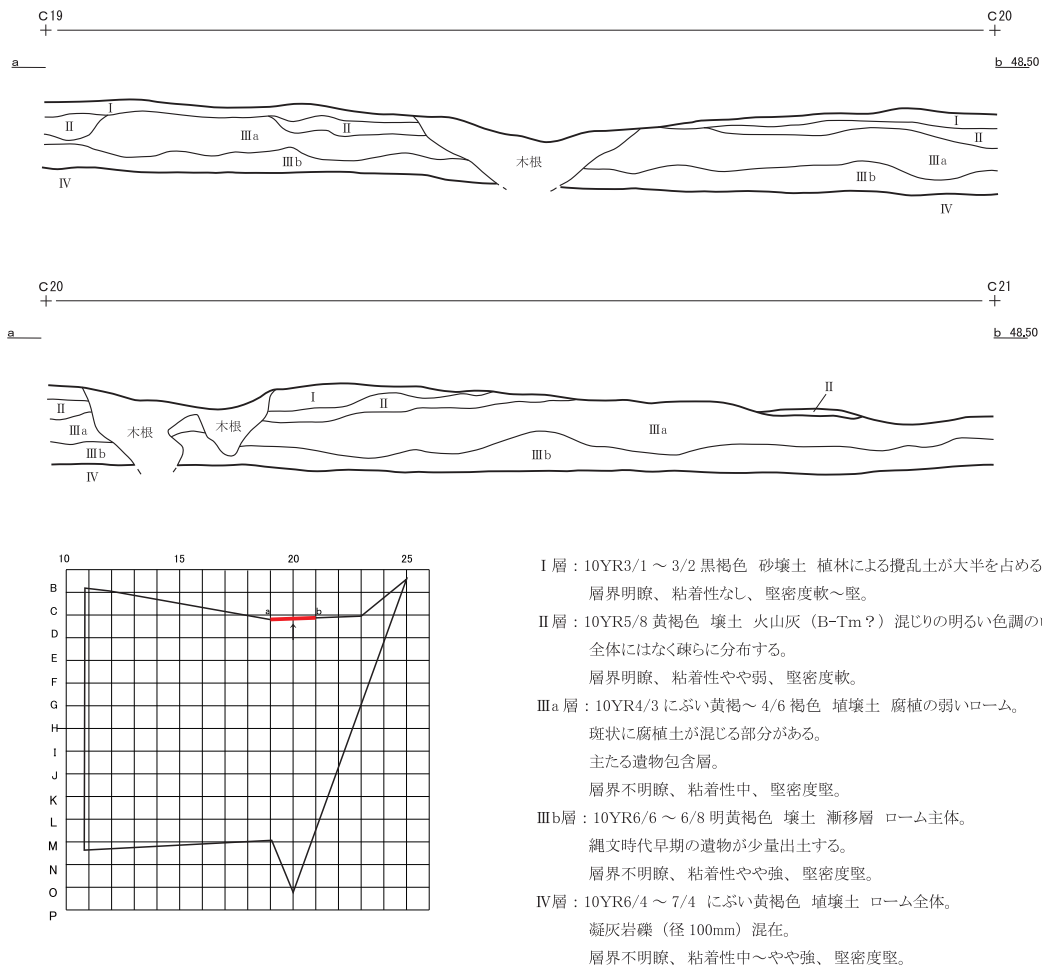


図 I - 2 調査区内の土層

## II 遺跡の位置と環境

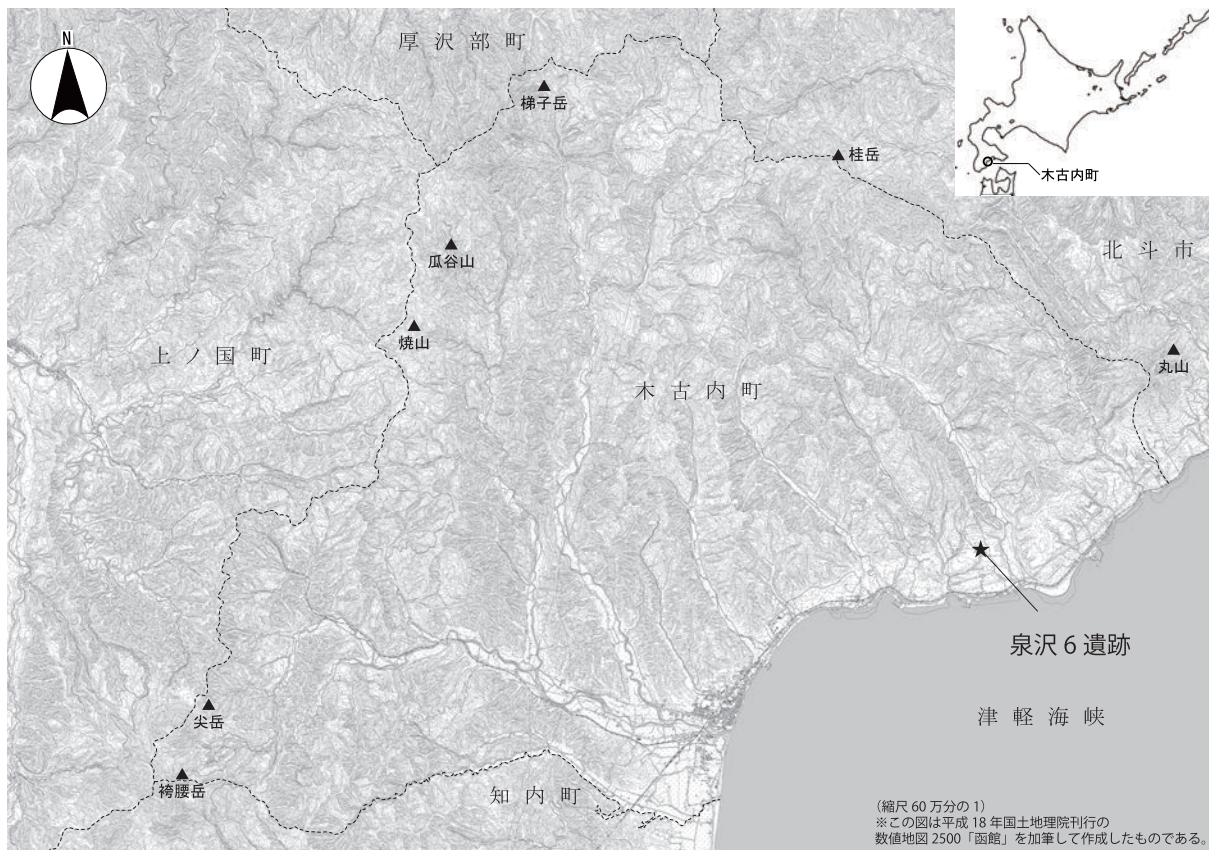
遺跡は函館市街から西方に約20km、木古内町市街地からは北東約6.8km、道南いさりび鉄道（旧JR江差線）泉沢駅の北約900mの現海岸線から1km内陸の東西を亀川と橋呉川に挟まれた標高40～50mほどの海岸段丘上に位置する。本遺跡西側には橋呉川の支流が浸食した落差10mほどの沢があり、それを挟んで対岸には泉沢4遺跡が、さらに小沢を挟んで500mほど西には、当センターが平成26年に発掘調査をした泉沢5遺跡が広がる。海側（南東）には支流から別れた小沢を挟んで泉沢遺跡が広がり、約1km北東側には、亀川を挟んで当センターが平成26年に発掘調査をした亀川5遺跡が広がる（図II-3参照）。

### 1 地形・地質

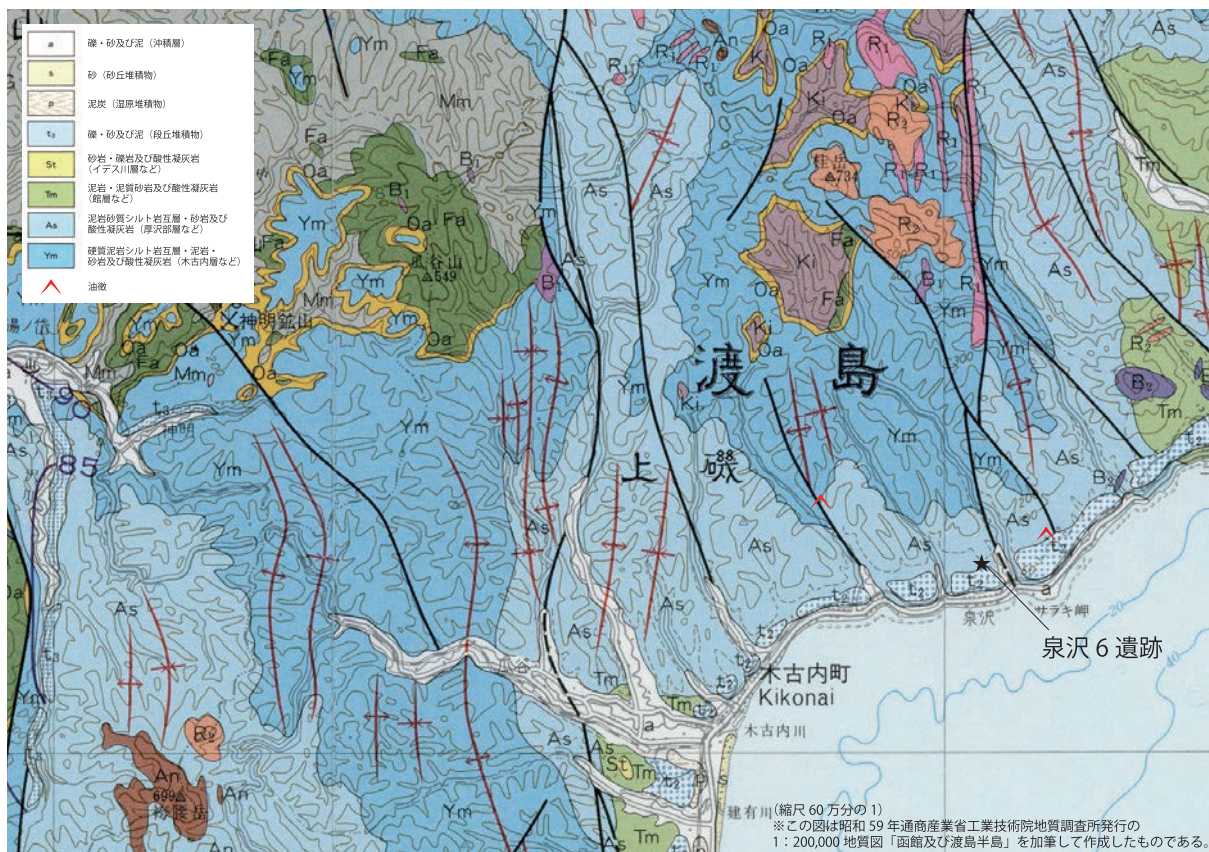
遺跡の所在する木古内町は、北海道南西部にある松前半島の中央東部に位置する。北は丸山（標高482.3m）と桂岳（733.5m）を結んだ線で北斗市と、北東は梯子岳（562.7m）を境に厚沢部町と、西側は瓜谷山（544.8m）、焼山（379.5m）を隔て上ノ国町と、南は建有川の右岸から袴腰岳（669.1m）を挟んで知内町に接している。東～南東方向は津軽海峡に面しており、函館湾と連続して南西方向に延びる海岸線が、東、南へと大きく方向を変える変換点となっている。地形はこの海岸に沿う形で発達する海岸段丘、その内陸に形成される低平な丘陵山地、さらに標高300～600mの山地の三つで構成される。町内の大釜谷川、亀川、橋呉川、幸連川、大平川、佐女川、瓜谷川、木古内川は山地より発し、津軽海峡に流れる。海岸段丘は大きく3つに分かれ、高位の段丘が標高40m前後、中位が標高20～30m前後、低位が標高10～15m前後とされ、（通産省工業技術院地質調査所 1979）泉沢6遺跡はこのうち高位の段丘に立地している。このような地形は中生代の上礫層群を基盤とし、それを覆う新第三紀に相当する桧山層群、さらにこれらを貫いて山体を形成する貫入岩体から成り立っている（図II-2）。遺跡周辺の桧山層は下位に木古内層、中位に厚沢部層、上位に館層が分布している。このうち木古内層は、主として珪質な硬質頁岩および硬質泥岩、軟質泥岩の互層からなり暗灰色泥岩層や砂岩層、凝灰岩層を挟有している。この層には剥片石器の石材となりうるものが含まれており、本遺跡で利用された剥片石器の石材の大多数を占めているものとみられる。また、遺跡周辺の幸連・亀川地区には掘削泥水やコア中に原油成分が認められる油徴の存在が確認されている。石器類に付着するアスファルトとの関連性が考えられる。

### 2 地名

木古内の地名は、寛永年間（1624年～1643年）に松前藩が領内を巡行し、全島の地図を作らせたときに付けられたのが始めとされている。由来としてアイヌ語の「リコナイ（高く昇る源）」、または「リロナイ（潮の差し入る川）」から転訛したものとされている。しかし「リコナイ」の記述が明治以前にみられないことから「リロナイ」が語源と考えるのが正しいとされる（木古内町HP）。また、泉沢地域はアイヌ語で「シュシュボッケ（柳の影・下）」と呼ばれ、集落は室町時代の嘉吉3年（1443年）頃には形成されていたと言われている。「泉沢」は東を亀川、西を橋呉川を境とする昭和4年からの行政字名で、和語に由来し、元禄13年（1700年）の「松前島郷帳」には「いつみ沢村」と記載がある。亀川に「さけ」がまるで泉が湧くようにたくさん上がったので、このような呼び名になったといわれている（木古内町HP）。



図Ⅱ-1 遺跡の位置と木古内町の地形



図Ⅱ-2 木古内町周辺の地質

### 3 周辺の遺跡

木古内町内には平成27年3月現在、旧石器時代から擦文文化期までの62か所の埋蔵文化財包蔵地が登録されている（図Ⅱ-3、表Ⅱ-1）。また、大平4遺跡などで幕末函館戦争時の遺構・遺物も少数確認されている。62か所の包蔵地のほとんどが縄文時代の遺跡で、主に津軽海峡を臨む海成段丘上に立地している。特に近年、函館江差道路建設に伴う試掘調査、緊急発掘調査により、海成段丘の中でもより内陸側にあたる高位の段丘面上の遺跡が多く認識されるようになった。

ここでは本遺跡を除く泉沢地区に所在する遺跡について概要を記す。（ ）内の数字は北海道教育委員会の遺跡登録番号である。

**泉沢遺跡**（B-05-06）：遺物包含地。標高40m前後の高位の海成段丘面上に立地する。津軽海峡線建設に先立つ踏査で土器片や剥片類が表面採取されている。

**泉沢2遺跡**（B-05-41）：集落跡。縄文時代前期～晩期、続縄文時代、擦文文化期。標高5～35m前後の低・中位の海成段丘面上に立地する。南渡島地区広域営農団地農道建設に伴い、平成10（1998）～平成13（2001）年にかけて木古内町教育委員会により発掘調査が行われた。調査面積は10,945m<sup>2</sup>で、西側の平坦面から台地の先端部急斜面にかけてのA地点（5,632m<sup>2</sup>）と湧水源に隣接する台地の東側平坦面にあたるB地点（3,113m<sup>2</sup>）、A地点に隣接し、低位の海成段丘面にあたるC地点（2,200m<sup>2</sup>）に分かれる。遺構は住居址12軒、土坑11基、Tピット1基、焼土58か所、石組み炉7か所、埋設土器1か所、埋石遺構1か所、集石遺構1か所が検出されている。出土遺物は約316,000点で、石器が大半を占めている。住居址は9軒中7軒が縄文時代後期前葉に属しており、出土遺物も同時期に帰属するものが多い。沢を挟んだ北側に泉沢5遺跡が位置している。

**泉沢3遺跡**（B-05-42）：遺物包含地。縄文時代後期。標高20～25mの中位の海成段丘面上に立地する。南渡島地区広域営農団地農道建設に伴い、平成8（1996）年に木古内町教育委員会により発掘調査が行われた。全体の調査面積は2,319m<sup>2</sup>で、平坦部（1,290m<sup>2</sup>）とそこから90mほど東側の東地点（1,029m<sup>2</sup>）に分かれる。遺構は焼土1か所が検出されたのみで、その他に旧河道跡が2か所確認されている。出土遺物は3,482点で、縄文時代後期前葉～中葉のものが出土している。

**泉沢4遺跡**（B-05-53）：遺物包含地。縄文時代。標高40mほどの高位の海成段丘面上に立地する。小さな沢を挟んで本遺跡の西側に隣接する。函館江差道路建設に伴い発見され、工事立会が行われた。頁岩製の剥片や打製石斧が出土している。

**泉沢5遺跡**（B-05-55）：遺物包含地。縄文時代。標高30～40mほどの高位の海成段丘面上に立地する。函館江差道路建設に伴い、平成26（2014）年に当センターによって行われた。調査面積は8,984m<sup>2</sup>である。遺構は住居址3軒、土坑19基、Tピット10基、焼土19か所、埋設土器1か所、集石遺構1か所が検出されている。住居址は3軒とも縄文時代後期前半期で、土坑は19基のうち11基が中期前半期、2基が後期前葉期に属する。出土遺物は15,206点で、土器は縄文時代中期前半と後期前葉期に帰属するものでほとんどを占める。

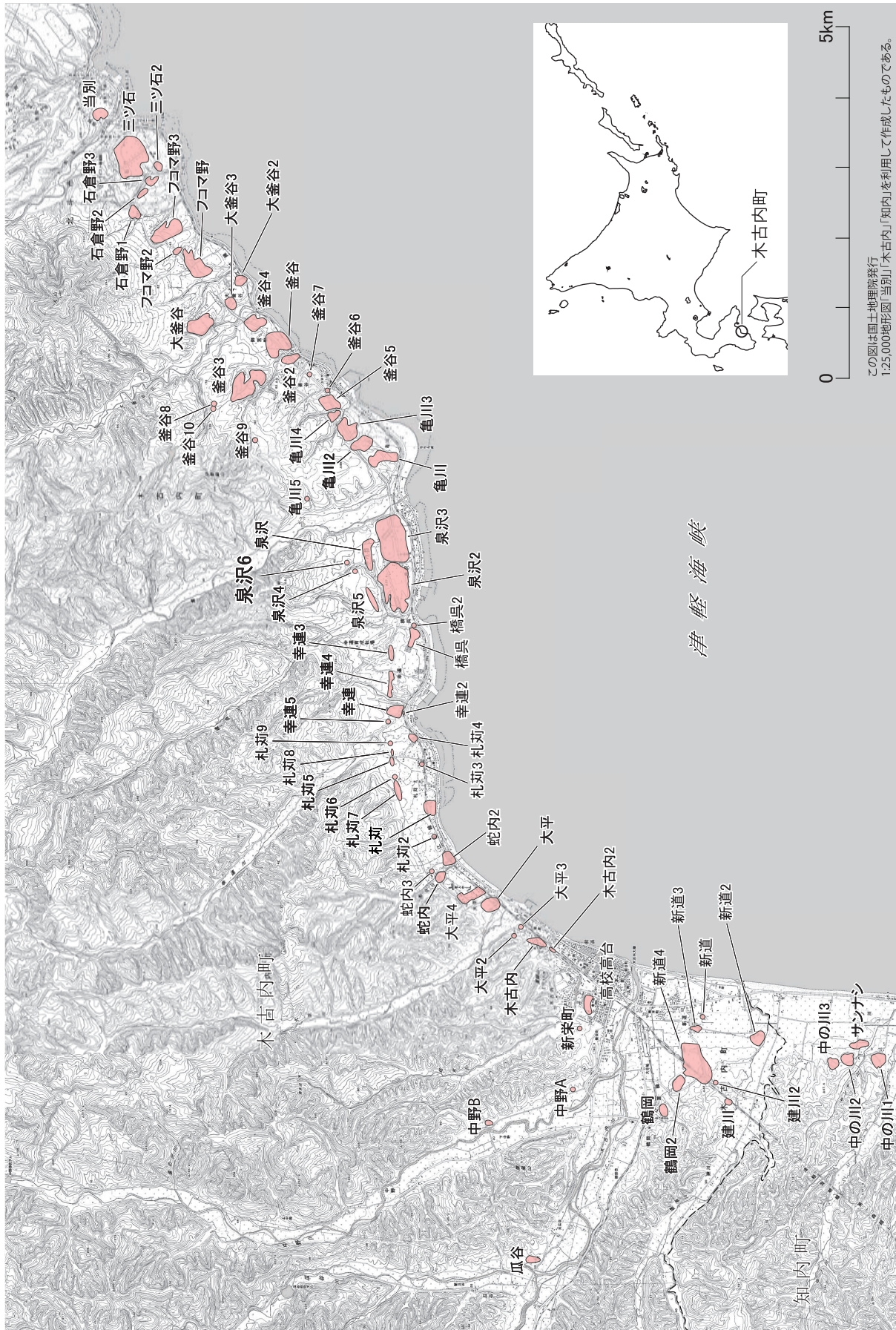


図 II-3 木古内町内周辺の遺跡

表Ⅱ-1 木古内町の遺跡一覧

登載番	遺跡名	種別	主な時期	調査歴(報告年)
B-01	新道遺跡	遺物包含地	縄文	
B-05-02	大釜谷遺跡	遺物包含地	縄文(中期・後期)	
B-05-03	木古内遺跡	集落跡	縄文(前期・中期)・擦文	2010・2011 道埋文(2014)
B-05-04	札苺遺跡	集落跡	縄文(晩期)・近世	1971・1972 北海道開拓記念館(1976)
				1973 町教委(1974)
				1985 道埋文(1986)
B-05-05	釜谷遺跡	集落跡	縄文(早期～晩期)・擦文	1991～1993 町教委(1999)
B-05-06	泉沢遺跡	遺物包含地	縄文	
B-05-07	大平遺跡	集落跡	縄文(早期～晩期)・擦文	2009～2011・2013 道埋文(2011・2016・2017)
B-05-08	蛇内遺跡	集落跡	縄文(前期～後期)	2000 町教委(2004)
B-05-09	新栄町遺跡	遺物包含地	縄文(後期・晩期)	
B-05-10	新道3遺跡	集落跡	縄文(中期・後期)	1996 町教委(1997)
B-05-11	新道2遺跡	集落跡	縄文(前期)	1997～2002 町教委(1999・2004)
B-05-12	中野A遺跡	遺物包含地	縄文	
B-05-13	中野B遺跡	遺物包含地	縄文	
B-05-14	瓜谷遺跡	遺物包含地	縄文	
B-05-15	大釜谷2遺跡	遺物包含地	縄文(前期・中期)	
B-05-16	釜谷2遺跡	遺物包含地	縄文	
B-05-17	橋呉遺跡	遺物包含地	縄文・続縄文(前半期)	
B-05-18	幸連遺跡	遺物包含地	縄文(中期・後期)	2016・2017 道埋文
B-05-19	蛇内2遺跡	集落跡	縄文(早期～晩期)	2009～2011 道埋文(2011・2012)
B-05-20	蛇内3遺跡	遺物包含地	縄文(後期・晩期)	
B-05-21	大平2遺跡	遺物包含地	縄文(後期・晩期)	
B-05-22	大平3遺跡	遺物包含地	縄文(中期)	
B-05-23	高校高台遺跡	遺物包含地	縄文(後期・晩期)	
B-05-24	鶴岡遺跡	遺物包含地	縄文	
B-05-25	鶴岡2遺跡	遺物包含地	縄文(前期～後期)・続縄文	1988・1989 町教委(1989・1990)
B-05-26	建川遺跡	遺物包含地	縄文(早期～後期)	1984 道埋文(1986)
B-05-27	新道4遺跡	集落跡	旧石器・縄文(早期～晩期)・続縄文	1984～1986・2013 道埋文(1986・1987・1988・2015)
B-05-28	木古内2遺跡	集落跡	縄文(前期)	2010・2011 道埋文(2011・2012)
B-05-29	大平4遺跡	集落跡	縄文(早期～中期・晩期)	2009・2010・2012～2014 道埋文(2011・2012・2017)
B-05-30	札苺2遺跡	遺物包含地	不明	
B-05-31	札苺3遺跡	遺物包含地	不明	
B-05-32	札苺4遺跡	遺物包含地	不明	
B-05-33	幸連2遺跡	遺物包含地	不明	
B-05-34	橋呉2遺跡	遺物包含地	不明	
B-05-35	建川2遺跡	集落跡	縄文(前～晩期)	1985・1986 道埋文(1987)
B-05-36	釜谷3遺跡	遺物包含地	縄文(後期)	
B-05-37	釜谷4遺跡	遺物包含地	旧石器・縄文(早期～後期)	1990 町教委(1991)
B-05-38	亀川遺跡	遺物包含地	縄文(晩期)	
B-05-39	亀川2遺跡	遺物包含地	縄文(中期～晩期)	1995 町教委(1998)
B-05-40	亀川3遺跡	集落跡	縄文(早期～後期)	1995 町教委(1998)
B-05-41	泉沢2遺跡	集落跡	縄文(前期～晩期)・擦文	1998～2001 町教委(2003・2004)
B-05-42	泉沢3遺跡	遺物包含地	縄文(後期)	1996 町教委(1998)
B-05-43	亀川4遺跡	遺物包含地	縄文	
B-05-44	釜谷5遺跡	集落跡	縄文(早期～晩期)	1993 町教委(1995)
B-05-45	釜谷6遺跡	遺物包含地	縄文	
B-05-46	釜谷7遺跡	遺物包含地	縄文	
B-05-47	大釜谷3遺跡	集落跡	縄文(前期～晩期)	2001 町教委(2003)
B-05-48	札苺5遺跡	遺物包含地	縄文(早期・前期・後期)	2011・2017 道埋文(2012)
B-05-49	札苺6遺跡	集落跡	縄文(中期・後期)	2011 道埋文(2014)
B-05-50	札苺7遺跡	集落跡	縄文(後期)	2013～2017 道埋文
B-05-51	釜谷8遺跡	遺物包含地	縄文(早期・中期・後期)	2011・2012 道埋文(2014)
B-05-52	釜谷9遺跡	遺物包含地	縄文	
B-05-53	泉沢4遺跡	遺物包含地	縄文	
B-05-54	亀川5遺跡	遺物包含地	縄文(後期・晩期)	2014 道埋文(2017)
B-05-55	泉沢5遺跡	集落跡	縄文(中期・後期)	2014 道埋文(2017)
B-05-56	札苺8遺跡	集落跡	旧石器・縄文(前期)	2014 道埋文
B-05-57	札苺9遺跡	遺物包含地	不明	
B-05-58	釜谷10遺跡	遺物包含地	縄文(後期)	2016 道埋文(2018)
B-05-59	幸連3遺跡	遺物包含地	縄文(中期)	2015 道埋文(2018)
B-05-60	幸連4遺跡	遺物包含地	縄文(前期後半・中期後半～後期前葉)	2015・2016 道埋文
B-05-61	泉沢6遺跡	遺物包含地	縄文(早期・後期)	2015・2016 道埋文(2018本書)
B-05-62	幸連5遺跡	集落跡	縄文(前期・中期・後期)	2016・2017 道埋文

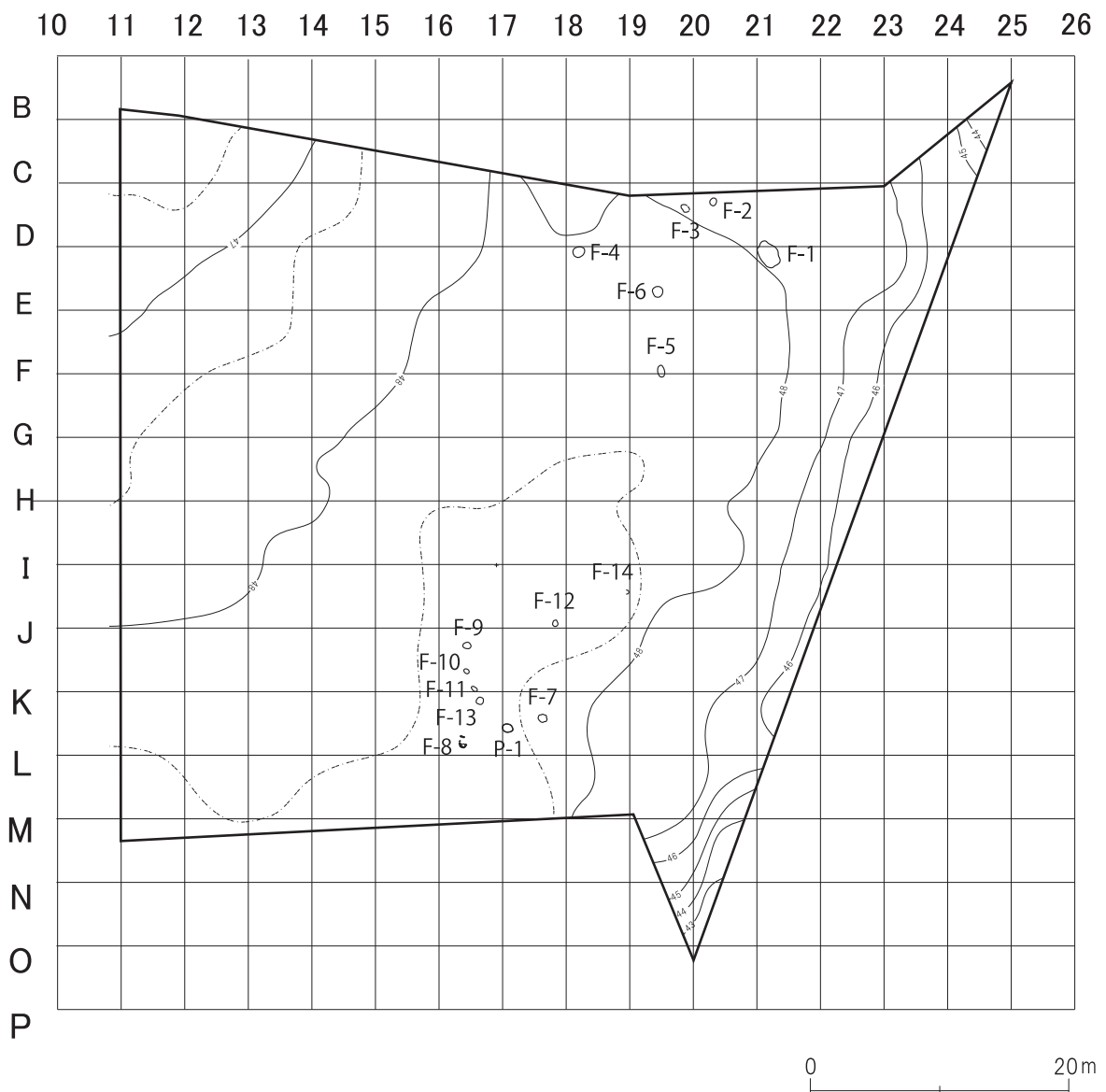
町教委：木古内町教育委員会、道埋文：北海道埋蔵文化財センター



## Ⅲ 遺 構

調査により検出された遺構は、土坑（P）1基、焼土14か所であった。

検出された場所は、調査区西側の沢に面した斜面縁から10～15m奥まった、標高48m前後の平坦面に集中して分布する。この分布域は、検出された遺物の出土範囲と重なっていることから、遺物も、これらの遺構に伴って持ち込まれたものとみられる。平成27年度の調査範囲から検出された焼土6か所については、やや深いⅢb層面から検出されており、付近で出土した縄文時代早期後半期の焼土と推測されている。平成28年度の調査範囲からは縄文時代早期の遺物は出土せず、縄文時代後期前葉の遺物のみの検出したため、焼土8か所と土坑についても同時期のものとみている。



図Ⅲ-1 遺構位置図

## 土 坑

P-1 K17区 86.6×67.0×25.4cm

特 徴：調査区北側のⅢa層より、遺物とともにやや暗い色調の土層が円形に落ち込むのを確認、調査をすすめると、長円形の土坑となった。坑底面は平坦に掘られ、縄文時代後期前葉の土器片が坑底面付近まで入っていた。検出面付近で検出された底部片は、周囲の包含層出土の破片と接合し、底にも縄文を施す深鉢底部片（図Ⅳ-3-57）になった。

時 期：覆土中の遺物から、縄文時代後期前葉とみられる。

(土肥)

## 焼 土

F-1 C・D21区 166.0×117.6×9.2

特 徴：調査範囲南側の平坦面に形成された焼土。Ⅲb層中位で検出した。平面形は不整楕円形で、断面はレンズ状である。全体に被熱しており、中心部が特に強い。上面および周囲に微細な炭化材が分布する（図の3の部分）。遺物は出土していない。

時 期：周辺の包含層出土の遺物から、縄文時代早期後半と推測される。

(芝田)

F-2 C20区 61.2×52.8×8.0

特 徴 調査範囲南側の平坦面に形成された焼土。Ⅲb層下位で検出した。平面形は楕円形で、断面はレンズ状である。強く焼けている。遺物は出土していない。検出面の高低に差があるが、隣接するF-3と規模・形状が類似しており、ほぼ同時期と考えられる。

時 期 周辺の包含層出土の遺物から、縄文時代早期後半と推測される。

(芝田)

F-3 C19区 58.8×32.8×14.8

特 徴 調査範囲南側の平坦面に形成された焼土。Ⅲb層上位で検出した。西側を抜根による攪乱で壊されている。平面形は楕円形と推測され、断面はレンズ状である。強く焼けている。遺物は出土していない。検出面の高低に差があるが、隣接するF-2と規模・形状が類似しており、ほぼ同時期と考えられる。

時 期 周辺の包含層出土の遺物から、縄文時代早期後半と推測される。

(芝田)

F-4 D18区 74.8×64.4×15.2

特 徴 調査範囲南側の平坦面に形成された焼土。Ⅲb層下位で検出した。平面形はほぼ円形で、断面はレンズ状である。強く焼けている。上部に微細な炭化材が混入する。遺物は出土していない。すぐ東側にフレイク・チップ集中があり、関連する可能性がある。

時 期 周辺の包含層出土の遺物から、縄文時代早期後半と推測される。

(芝田)

F-5 E・F19区 64.4×40.0×9.6

特 徴 調査範囲南側の平坦面に形成された焼土。Ⅲb層下位で検出した。平面形は長円形で、断面はレンズ状である。強く焼けている。上部に微細な炭化材が混入する。遺物は出土していない。

時 期 周辺の包含層出土の遺物から、縄文時代早期後半と推測される。

(土肥)

F-6 D19区 78.8×79.2×14.8

特 徴 調査範囲南側の平坦面に形成された焼土。Ⅲb層下位で検出した。平面形はほぼ円形で、断面はレンズ状である。強く焼けている。上面に微細な炭化材が分布する。遺物は出土していない。

時 期 周辺の包含層出土の遺物から、縄文時代早期後半と推測される。

(芝田)

F-7 K17区 71.1×62.8×6.6

特 徴 平成28年度の調査範囲中央の平坦面に形成された焼土。Ⅲa層中で検出した。平面形は不整形で、断面は皿状で、焼けは弱い。上面に微細な炭化材が分布する。検出面から縄文時代後期前葉の土器片が出土している。

時 期 検出面付近出土の遺物から、縄文時代後期前葉と推測される。

(土肥)

F-8 K17区 30.2×24.1×5.6cm (焼土範囲)

特 徴 平成28年度の調査範囲中央の平坦面に形成された石囲い炉。Ⅲa層中で数個の被熱した礫が並んで出土したことから付近を精査したところ、8個の被熱礫が弧線状に並んで検出された。さらに北側からは、炉から動いたとみられる礫が2点みつかった。壊された炉跡とみて礫の周りを掘り下げると、焼土層を検出した。離れた礫近くにも薄く焼土がみつかったが、これも礫同様に元の位置から動いているものとみられる。本来のこの石囲い炉は、長径65cmほどの長円形だったと推測される。焼土もほぼ取り除かれ、焼けの弱い縁辺部が残った状態と考えられる。竪穴住居址である可能性もあったので、付近で柱穴を探したが、検出されなかった。

時 期 付近出土の遺物から、縄文時代後期前葉と推測される。

(土肥)

F-9 J16区 63.6×49.8×7.8cm

特 徴 平成28年度の調査範囲中央の平坦面に形成された焼土。Ⅲa層中で検出した。平面形はおおむね卵形で、断面はレンズ状で、強く焼けている。上面に微細な炭化材が分布する。焼土サンプル中から縄文時代後期前葉の土器片が2点出土している。

時 期 サンプル中の遺物から、縄文時代後期前葉と推測される。

(土肥)

F-10 J16区 44.2×32.8×5.8cm

特 徴 平成28年度の調査範囲中央の平坦面に形成された焼土。Ⅲa層中で検出した。平面形は卵形で、断面は皿状で、焼けは弱い。上面に微細な炭化材が分布する。遺物は出土していない。

時 期 付近出土の遺物から、縄文時代後期前葉と推測される。

(土肥)

F-11 J16区 51.2×30.6×9.8cm

特 徴 平成28年度の調査範囲中央の平坦面に形成された焼土。Ⅲa層中で検出した。平面形は長円形。断面は皿状で、強く焼けている。上面に微細な炭化材が分布する。遺物は出土していない。

時 期 付近出土の遺物から、縄文時代後期前葉と推測される。

(土肥)

F-12 I17区 50.2×48.0×3.8cm

特 徴 平成28年度の調査範囲中央の平坦面に形成された焼土。Ⅲa層中で検出した。平面形は不整円形。断面は皿状で、上面を掘りすぎているため、焼土層は薄い。上面に微細な炭化材が分布する。焼土サンプル中から縄文時代後期前葉の土器片4点が出土しているほか、付近でも同時期の遺物がまとまって出土している。

時 期 焼土サンプル中の遺物から、縄文時代後期前葉と推測される。

(土肥)

F-13 K16区 78.8×79.2×15.4cm

特 徴 平成28年度の調査範囲中央の平坦面に形成された焼土。Ⅲa層中で検出した。平面形は不整円形。断面は皿状で、強く焼けている。上面に微細な炭化材が分布する。遺物は出土していない。

時 期 周辺の包含層出土の遺物から、縄文時代早期後半と推測される。

(土肥)

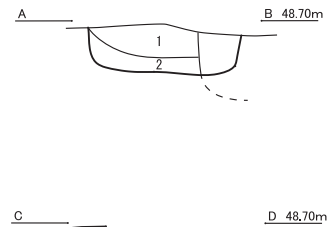
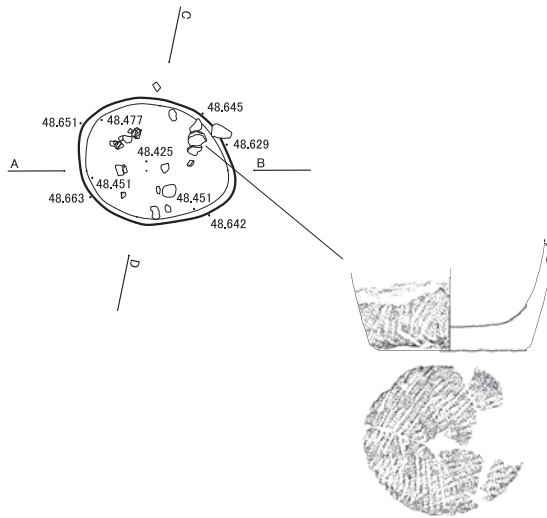
F-14 I18区 30.9×54.2×5.6cm

特 徴 平成28年度の調査範囲中央の平坦面に形成された焼土。Ⅲa層中で半分を掘りすぎた時点で検出した。平面形は円形で、断面はレンズ状である。上面も削りすぎだが、焼けは強かったようである。検出面脇から被熱した礫片や礫が出土している。土器は出土していない。

時 期 周辺の包含層出土の遺物から、縄文時代早期後半と推測される。

(土肥)

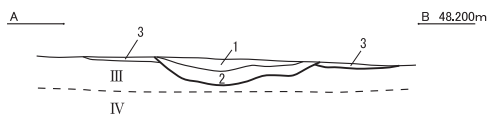
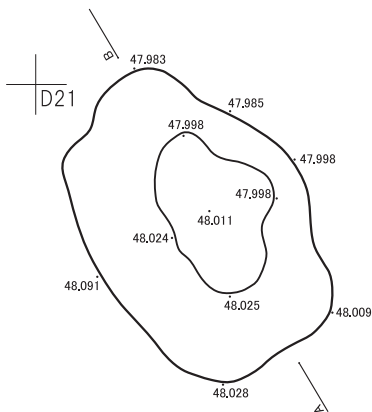
P-1



L17

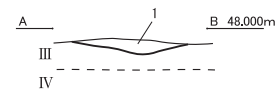
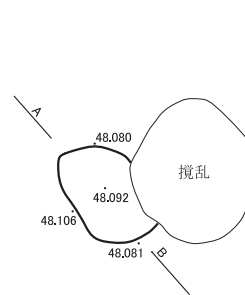
F-2(H-1 1層中)  
 1. 5YR2/4 極暗赤褐色埴壤土、炭化物φ2~4mm含む  
 2. 5YR3/4 暗赤褐色、焼土

F-1



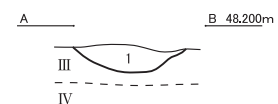
F-1  
 1. 5YR5/8明赤褐~7.5Y5/6明褐色 焼土 強く焼けている 上面に炭化材  
 2. 5YR5/6明赤褐~7.5YR4/6褐色 焼土 レンズ状(漸 粘やや弱 堅  
 3. 7.5YR4/3褐色 III層土に炭化材が混入する 粘やや強 堅

F-3



F-2  
 1. 5YR5/6 明褐色 焼土 強く焼けている(レンズ状)  
 粘やや強、しまり軟

D20



F-3  
 1. 5YR5/8 明褐色 焼土 強く焼けている(レンズ状)  
 粘中~やや弱、しまり軟

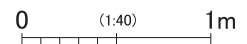
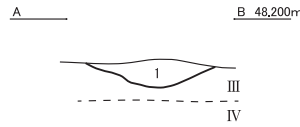
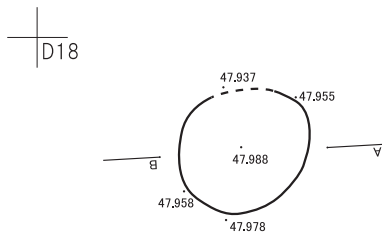


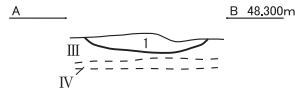
図 III-2 P-1・F-1~3 平面図・断面図

F-4



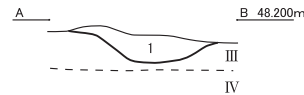
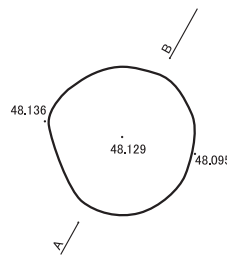
F-4  
1. 5YR5/6明赤褐〜7.5YR4/6褐色 焼土 強く焼けている(レンズ状)  
上部に炭化材(5mm)分布、粘中、しまり軟

F-5



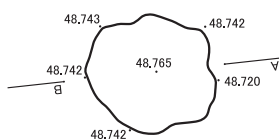
F-5  
1. 7.5YR2/6 褐色埴壤土 強 すこぶる壁 5YR4/8(赤褐色)の焼土ブロックを15%、炭化物粒少量含む

F-6

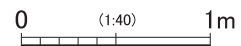


F-6  
1. 5YR5/8 明赤褐色 焼土 強く焼けている(レンズ状) 上面に炭化材(5mm)  
粘性やや弱 しまり軟

F-7

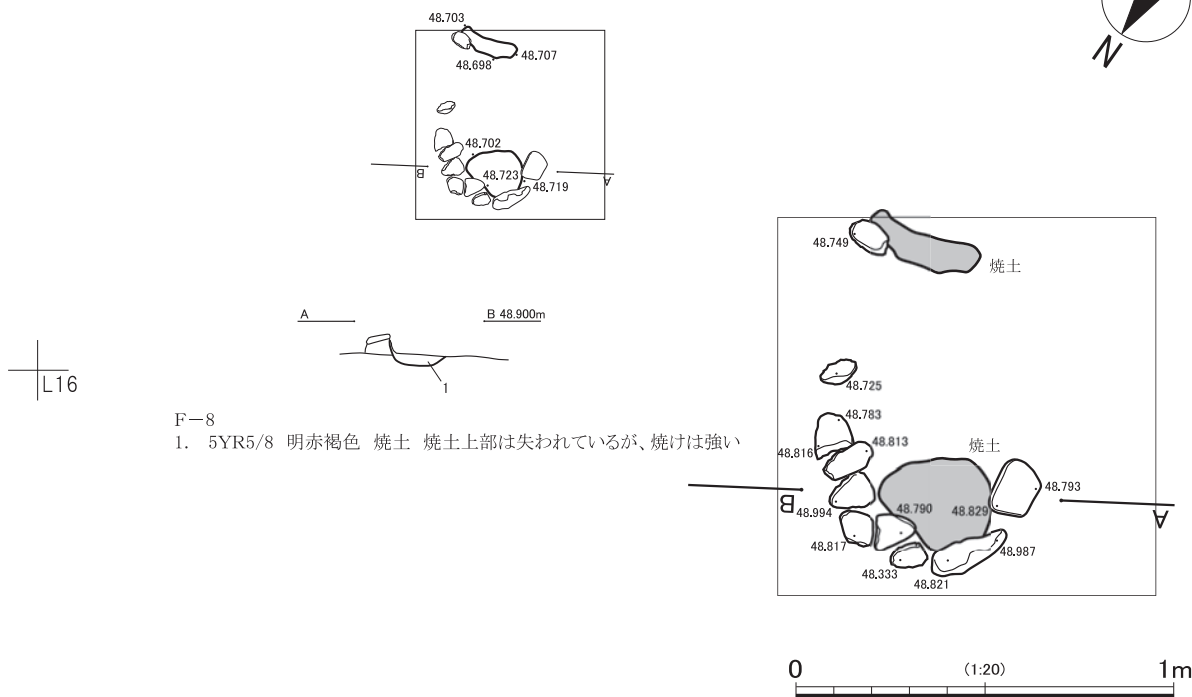


F-7  
1. 10YR3/1 黒褐色 木根によるII層の落ち込み  
1. 5YR5/8 明赤褐色 焼土 レンズ状に強く焼ける



図Ⅲ-3 F-4~7 平面図・断面図

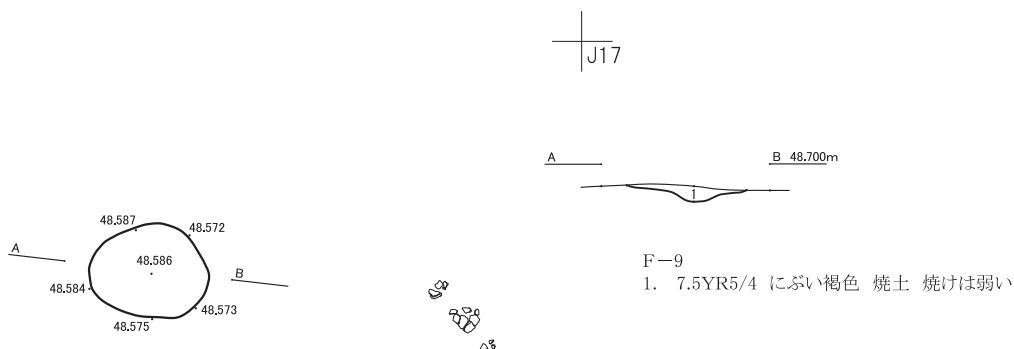
F- 8



F-8

1. 5YR5/8 明赤褐色 焼土 焼土上部は失われているが、焼けは強い

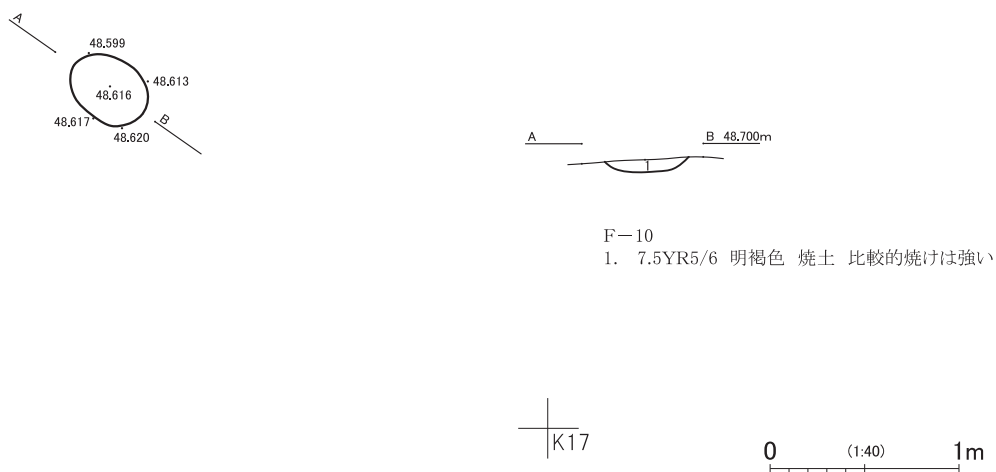
F- 9



F-9

1. 7.5YR5/4 にぶい褐色 焼土 焼けは弱い

F- 10

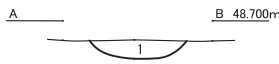
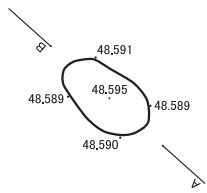


F-10

1. 7.5YR5/6 明褐色 焼土 比較的焼けは強い

図Ⅲ-4 F-8~10平面図・断面図

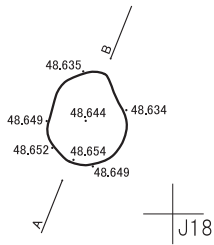
F-11



K17

F-11  
1. 7.5YR5/4 にぶい褐色 焼土 焼土層は厚い

F-12



F-12  
1. 7.5YR5/4 にぶい褐色 焼土 焼けは弱い

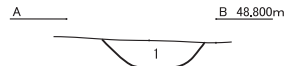


J18

F-13



K17



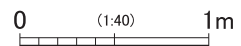
F-13  
1. 7.5YR5/6 明赤褐色 焼土 レンズ状に強く焼け、焼土層も厚い

F-14

J19



F-14  
1. 7.5YR5/4 にぶい褐色 焼土 上面を削りすぎで焼土層は薄い



図Ⅲ-5 F-11~14平面図・断面図



## IV 遺 物

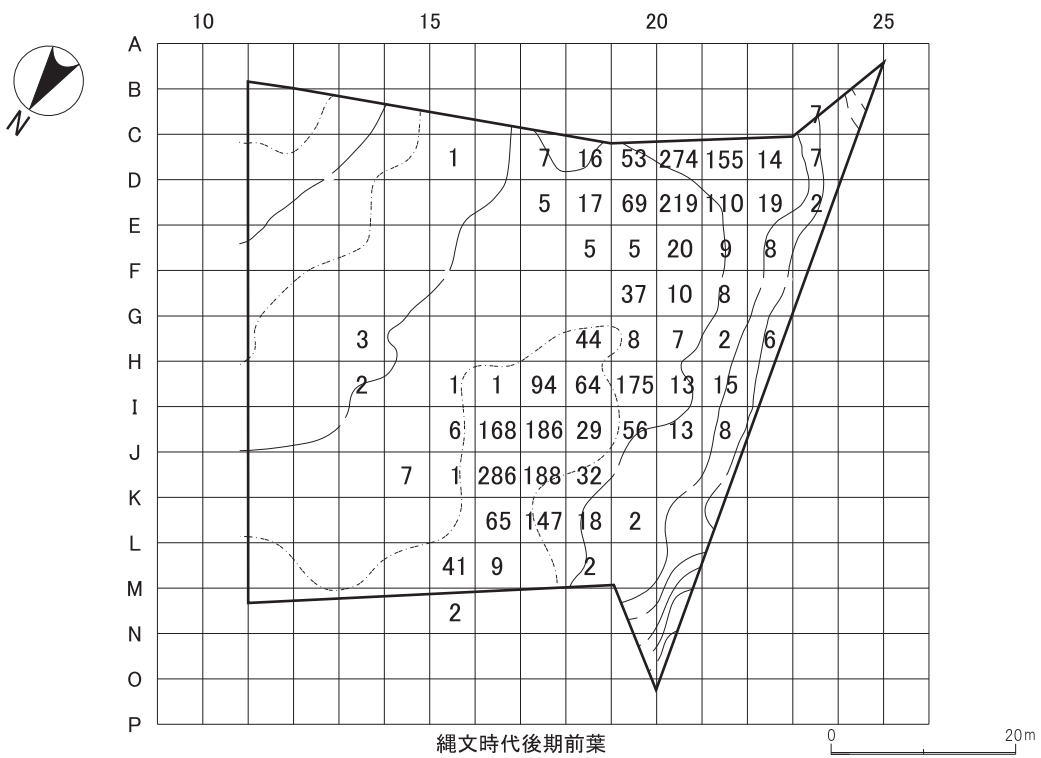
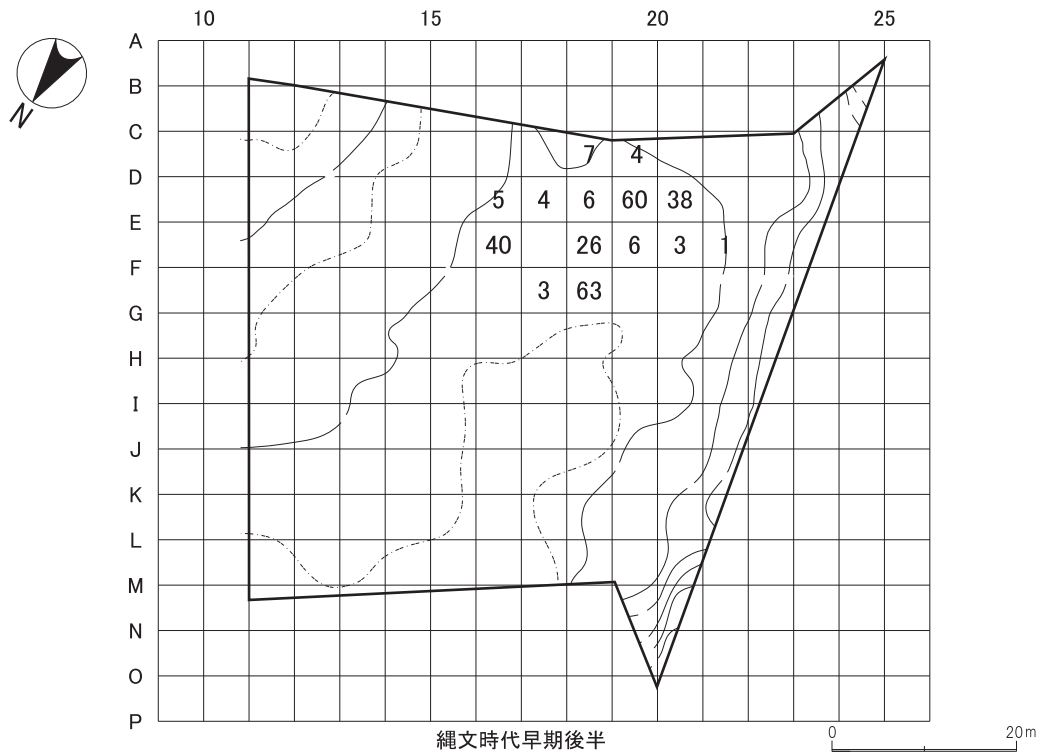
### 1 遺物出土状況

調査の結果、遺構や包含層から出土した遺物総点数は8,102点で、内訳は土器3,112点、剥片石器類4,536点、礫石器類453点である。(表V-1)発掘区別に縄文時代早期後半と後期前葉の土器出土点数分布を図IV-1に示した。縄文時代早期後半期の土器は、すべてコッタロ式相当とみられ、その分布は、調査区南側の約300m<sup>2</sup>の局地的な範囲、Ⅲ層下位(Ⅲb層)に偏る。平成27年度に調査した焼土の分布も、この範囲と重なることから同時期のものとみている。早期後半期の土器片は、割れが細かく個体数も少ないとみられるが、同時期の石器類は、石鏃、つまみ付ナイフなど、特徴的な形状のものが出土している。縄文時代後期前葉の土器片は、調査区西側の斜面縁から20mほどの範囲に全般に分布する。石器類もおおむねこの範囲から出土していることから、ほとんどの遺物は同時期のものとみてよいであろう。Ⅲ層の上位がこの時期の主な包含層とみられるが、Ⅱ・Ⅲ層は植林による攪乱を受けており、土器片がまとまって出土することはあっても、一個体がまとまって出土することはなかった。縄文時代晩期の土器は口縁部の小片がJ16区から1点と、無文の胴部片の端に一部沈線が残る小片がH19区から1点出土した。層位はいずれもⅢa層である。いずれも小片であったため未掲載であるが、口縁部の内側に沈線が施されるなど、縄文時代晩期後葉の鉢形土器の特徴がみられた。このほか表I-1に示す土器片の合計点数のほかに、陶器の土瓶注口部片1点がI15区のI層で回収されている。

### 2 土 器 (図IV-2~4 図版18~22)

図IV-2-1~7は縄文時代早期後半のコッタロ式相当の破片である。1、2、4、5には縄による刻みが施された貼付帯が付される。1は口縁部片で、口唇には縄による刻みが、口縁部には自縄自巻の原体が縦方向に連続して圧痕される。2には4条の貼付帯と自縄自巻の圧痕が施される。3には結束の縄文と棒状工具による押引文による凹帯が5条施される。4には5条の貼付帯と縦に縄の圧痕が付される。5は自縄自巻の圧痕により山型の文様が施される。6、7は底部片で、6には自縄自巻の原体が縦方向に圧痕され、7には縄文が施される。8~57は縄文時代後期前葉の天裕二式相当の破片である。8は口唇部を平らに調整し、無節の縄文が施される。9~11は同一個体の口縁部片で、8と同様に口唇を平らに調整し、地文に細かいLRの縄文を施し、口縁部にS字状の結節縄文が施される。

12は口唇を平らに調整し、口縁部にのみLR、そのほかはRLの縄文を施したもの。破片中央に縦方向にZ字状の結節縄文が施される。これら8~12は縄文時代前期の破片である可能性もあったが、後期前葉の北斗市押上1遺跡の資料中に同様な結節縄文が施される資料が含まれることから、後期前葉の破片と考えた。13、14は同一個体の口縁部片である。地文はRLで、口縁部には一条の沈線の上に幅のある凹帯を付し、器形は広口の壺状になる。無文の口縁部には2列の単刻沈線文が施される。15は13、14の模倣品のような土器で、地文は副節のLRで、無文の口縁部の下位に1条の沈線文が施される。16はやや口縁部が外反する深鉢で、口唇を平らに調整し、口縁部にのみLRの縄文を施し、地文には縦の結束縄文を付す。17は大型の深鉢口縁部片である。口唇は平らに調整され地文にはLRの斜行縄文が施される。焼の良い特徴的な地文のため、同一個体とみられる破片がH17区Ⅲa層から74点出土している。18、19は同一個体の可能性がある。胴部には格子目状に右撚りの圧痕が付されるが、19の縄の交点が深く圧痕されるのに対し、18にはそのような状況はない。20は口唇を平らに調整し、口縁部の貼付帯と口唇直下に縄線文を付す。21は円形の粘土粒が貼付された口縁部小片である。地文にはRLの斜行縄



図IV-1 包含層出土土器分布図

文が施される。このような粘土粒が口縁部に添付される例は同時期の小型の深鉢にみられる。22は口縁がやや外反する小形の鉢で、縦方向に磨かれた無文地に円形の浅い刺突で文様が施される。23の口唇は平らに調整され、口縁部に2条の縄線文が施される。24の口唇は外反し、地文は縦に羽状縄文が施され、口縁に縦方向に貫通穴が空けられた貼付けが施される。25の口唇は平らに調整され、地文は縦にRLの縄文を施文し、同原体を横方向に施文し羽状にしている。26、27は同一個体で破片はすべてI16区Ⅲa層より出土。口縁部は輪積粘土の折り返しが部分的にみられ、地文は口縁はLRの原体を横に、胴部は同原体を縦に施文する。28～30は同一個体で主にI16区、K17区Ⅲa層から破片は出土している。口縁をやや外反させ、その際に口縁直下がやや窪む。地文は口縁にRL、胴部にLRの縄文を施し、施文原体の境に浅い凹帯が付される。31は口縁部に粘土紐を貼付し、口唇を平らに調整する。地文はLRの原体を貼付帯上は横に、胴部は縦に施文する。32～34は別個体であるが、口唇の調整や、口縁部の貼付帯、地文の施文は31と同じである。35は地文が口縁部、胴部ともRLで貼付帯下位をナデ調整している。36は口唇を切出し状に調整、37はLRの地文を羽状状に施文、38は口縁部の貼付帯下を丁寧にナデ調整し稜線を作り出している。39の口縁部は粘土紐の折り返しで、口縁がすままる調整である。40、41は同一個体片。40の口縁内側は粘土紐が剥離している。口唇と口縁下部に貼付帯を施しRLの縄文を施す。無文の口縁部に2条の縄線文を付す。42～48は胴部片、42～46には貼付帯が付され、地文と施文方向を変えている。47は胴下部片で、自縄自巻の絡縄体が施される。48は縦方向にLRの縄文が施される。49～57は底部片である。49の一部に底が残る小型の深鉢片である。50の底部周囲は横方向に指でなでられ、底部には葉脈の圧痕が残る。51は小形の底部片。地文はRLである。52は無文の底部片で、調査時に底を破損した。53は深鉢底部片とみられる。地文はLRである。54は最も小形の底部片。地文はRLである。55の底部周囲はヘラで無文に調整される。地文は無節である。この土器の同一個体片は、H～Kの16～19の範囲で37片がみついている。56の底部周囲もヘラで無文に調整されている。57は、本遺跡で出土した最も大きな底部片である。破片の半分はP-1の検出面から、残りは土坑の位置するK17区包含層から出土している。土坑に包含層から流れ込んだ遺物とみられる。底部にも胴部と同じRLの縄文が施される。

### 3 石器 (図IV-5～10 図版22～26)

1～8は石鏃である。このうち1～5は木葉形の無柄の石鏃で、基部は3～5ミリ幅で平らに調整される。縄文時代早期のコッタロ式に伴うものとみられる。1、2は頁岩製で、2の先端は欠けている。3～5は黒曜石製で、これと同形とみられる黒曜石製の石鏃片がこのほかに3点出土している。黒曜石の産地同定では、すべて赤井川産の黒曜石であった。6～8は有柄の石鏃で、いずれも頁岩製である。これらの石鏃は後期前葉のものともみられる。

9～12は石錐である。9は縦長の剥片両側に剥離を加えたもの。10は両面調整の石器の一端を細長く調整したもの。11、12は方形の剥片の一端に刃部を作出したもの。

13～17はつまみ付ナイフである。すべて頁岩製で、いずれも右側に刃部を作出し、腹面の曲辺側には両面調整を加える。出土位置からもすべて縄文時代早期のコッタロ式に伴うものとみられる。

18～25は両面調整石器あるいはヘラ状石器である。19～23はヘラ状石器ですべて頁岩製である。縦長剥片の背面全面に剥離調整を加え、腹面は両側と端部に刃部調整を加えたもので、出土位置からこれらも縄文時代早期の所産とみられる。18は縦長剥片の両側に刃部を作出したもの、24、25は木葉形の剥片の縁辺に刃部を作出する。

26～29はスクレイパー類である。29の端部には角度のある刃部が作出される。30、31は楔型石器で、

厚みのある剥片の両極に打痕が残る。32、33は石核である。32は図上部が原石面、33は背面が原石面で、腹面側から剥片を取っている。

34～38は石斧である。34は刃部辺で、片岩に入る貫入から割れたもの。35～38は基部片で、36が蛇紋岩製、ほかは緑色片岩製である。

39～42は敲石である。39は珪化の進んだ砂岩製で、長軸先端の角に敲打痕が残る。40は頁岩製で、三角錐形の礫の頂部で敲打している。41は扁平な長円形礫の角や側面に敲打痕が残る。42は厚みのある扁平礫の側縁に敲打痕が残る。

43、44は凹み石である。43は縦長の凝灰岩製で、一端に使用痕がある。43は被熱した安山岩製で、両端が欠落する。両面に使用痕が残る。

45～48はすり石である。46は断面が三角形の礫を使用したもの。46、47は扁平礫の周囲に加工を加え、一面を使用したもので、扁平打製石器にちかい形状である。47の擦り面は丸みをおびる。48は自然礫の一辺を使用したもの。

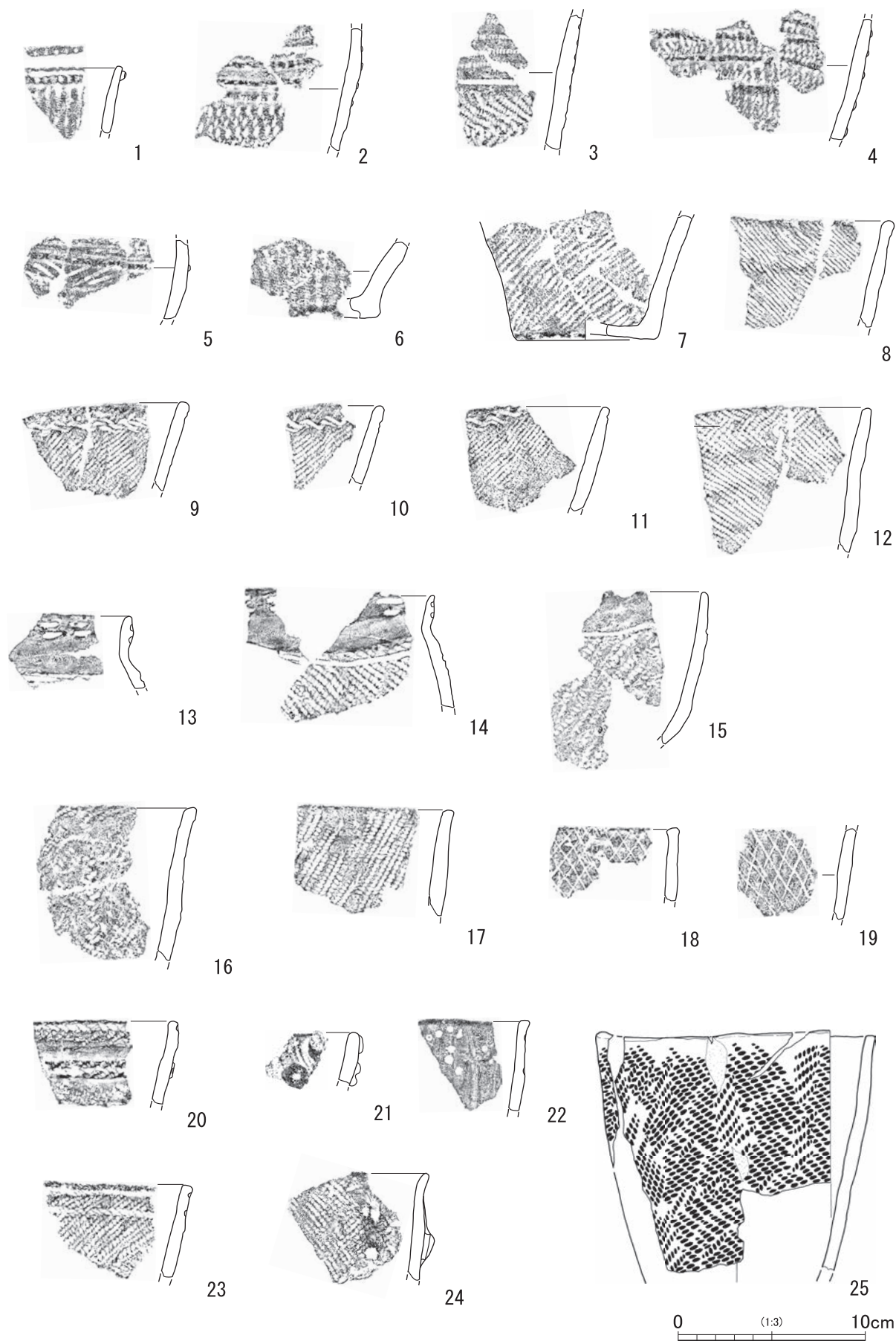
49～52は石錘である。49、51は扁平亜円礫の4辺に敲打による抉りを加えたもの。50は扁平亜円礫の長軸を打ち欠いたものである。49～51は縄文時代早期の所産と考えられる。52は大型の長円形の礫の長軸に敲打を加えたものだが、一部に敲打による凹みもあり、扁平打製石器の未成品ともみえる。

53～55は砥石である。53は砂岩製の扁平礫の一面を使用したもの。54は現代の砥石で、側縁はノコギリで切られ、直方体に面取りされている。表裏両面に使用痕が残る。55は扁平な自然石の一面に擦痕で磨かれた面が2ヵ所残るもの。

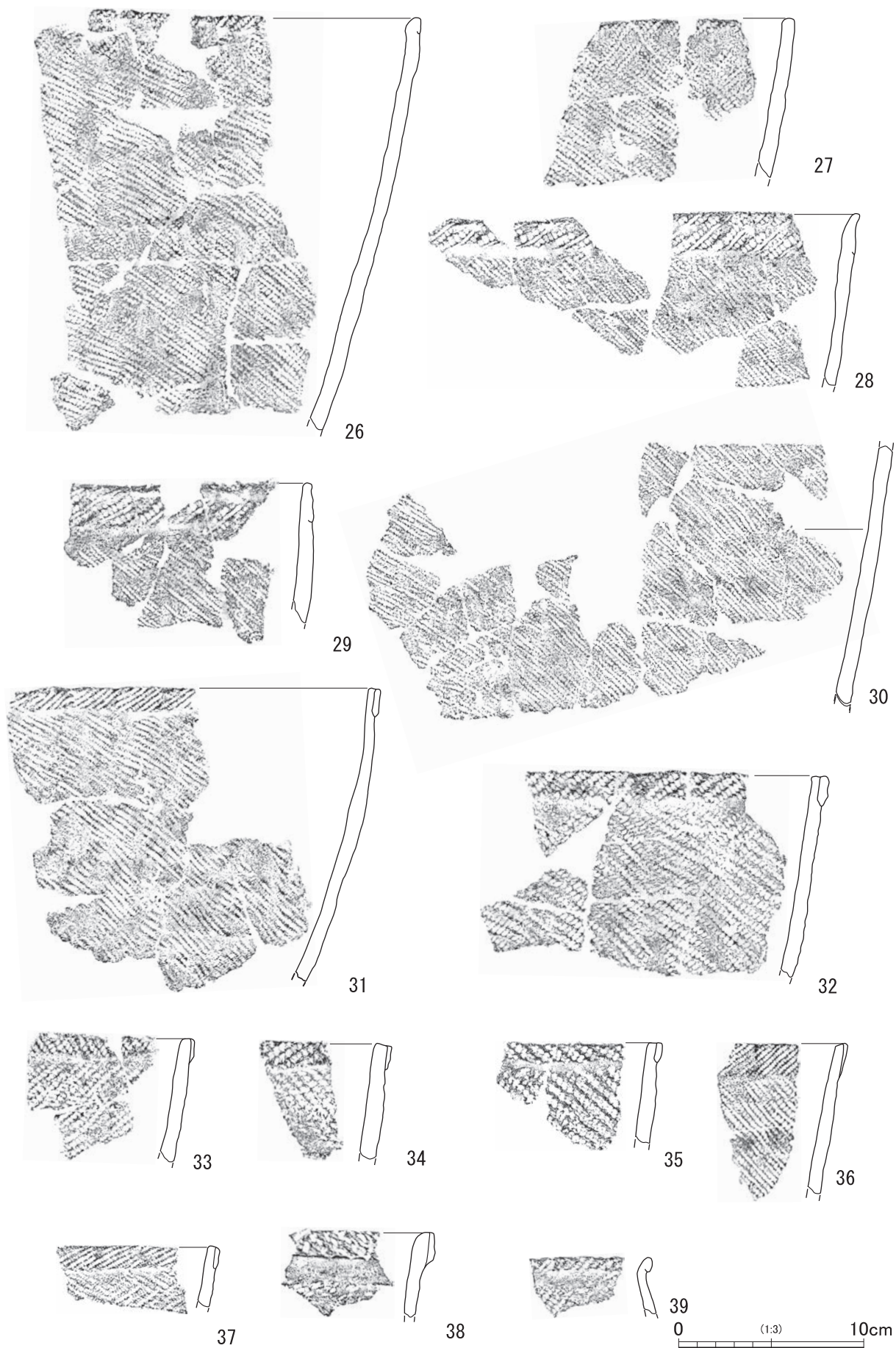
56、57は石皿である。この石皿はF19区の風倒木Ⅲ層の落ち込み下部から出土したものである。出土状況は図版3に掲載した。出土時は石皿3点のほか礫が出土している。落ち込みの形状は、片側がなだらかで、風倒木とみられるが、落ち込みの下部に並んでいることから、窪みの底に石皿を安置した状態にもみえる。石皿3点のうち、手前に写っている1点が脆弱な礫岩製で、取上げ時に割れてしまい実測に至っていない。台帳上はⅠ層から出土としているが、Ⅲ層の落ち込み下位から出土していることから縄文時代早期のものである可能性がある。56は扁平な安山岩の自然石の片面に使用し凹みがあり、擦痕や敲打痕がみられる。57も56同様扁平な安山岩の自然石の片面を使用したものだが、図の下位側などに凍結などの風化による剥落が生じている。

#### 引用・参考文献

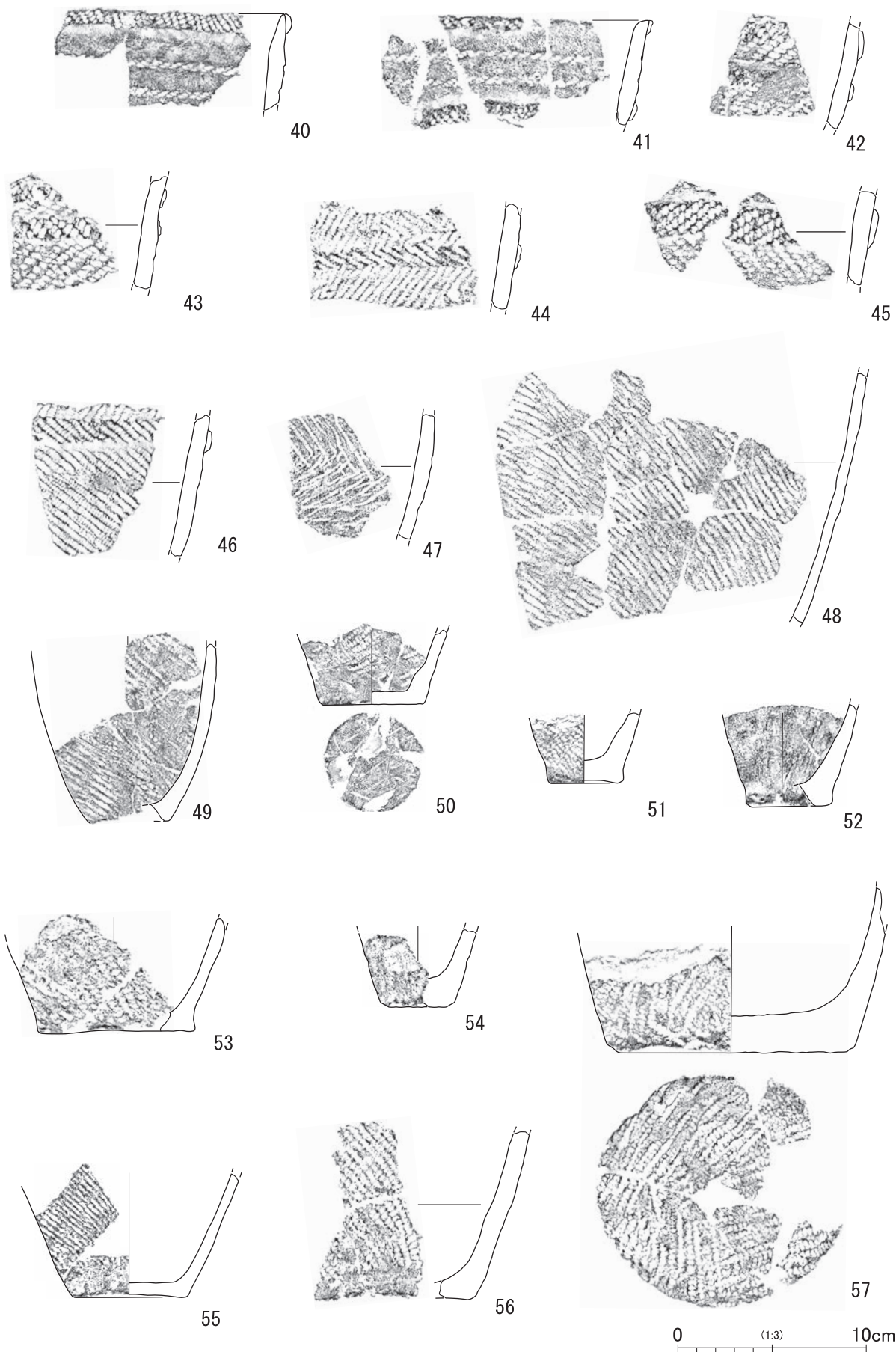
- 竹内理三 1987『角川日本地名大辞典』Ⅰ 北海道 上巻 地名編  
(財)北海道埋蔵文化財センター2006『森町 三次郎川右岸遺跡』北埋調報233  
(公財)北海道埋蔵文化財センター2014『木古内町 札苅6遺跡』北埋調報301  
(公財)北海道埋蔵文化財センター2016『北斗市 押上1遺跡』北埋調報312  
(公財)北海道埋蔵文化財センター2017『木古内町 大平遺跡(3)』北埋調報328  
(公財)北海道埋蔵文化財センター2017『木古内町 大平遺跡(4)』北埋調報329  
(公財)北海道埋蔵文化財センター2017『福島町 館崎遺跡』北埋調報333  
(公財)北海道埋蔵文化財センター2017『木古内町 泉沢5遺跡』北埋調報330  
(公財)北海道埋蔵文化財センター2017『木古内町 亀川5遺跡』北埋調報332



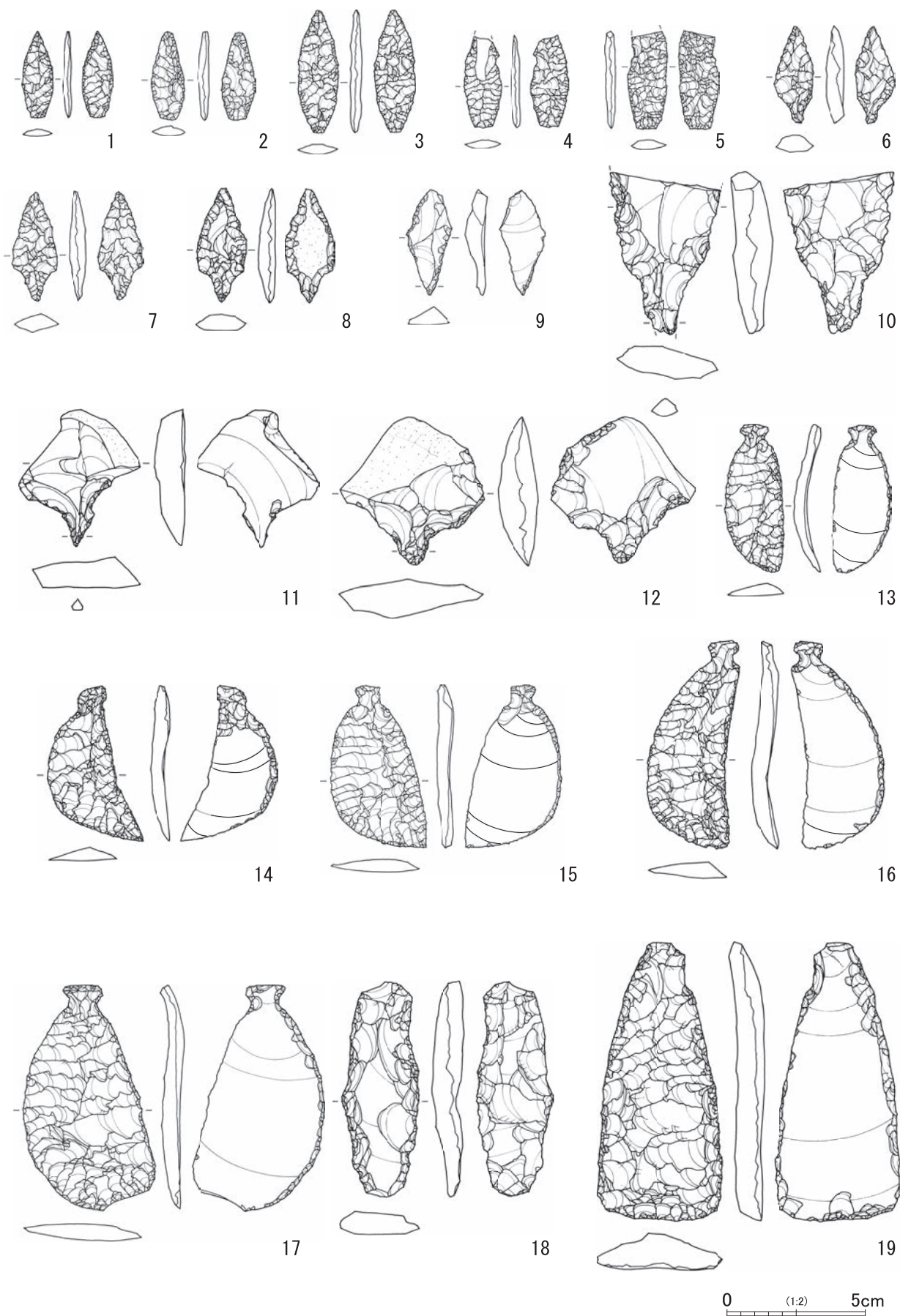
图IV-2 土器实测图(1)



図IV-3 土器実測図(2)

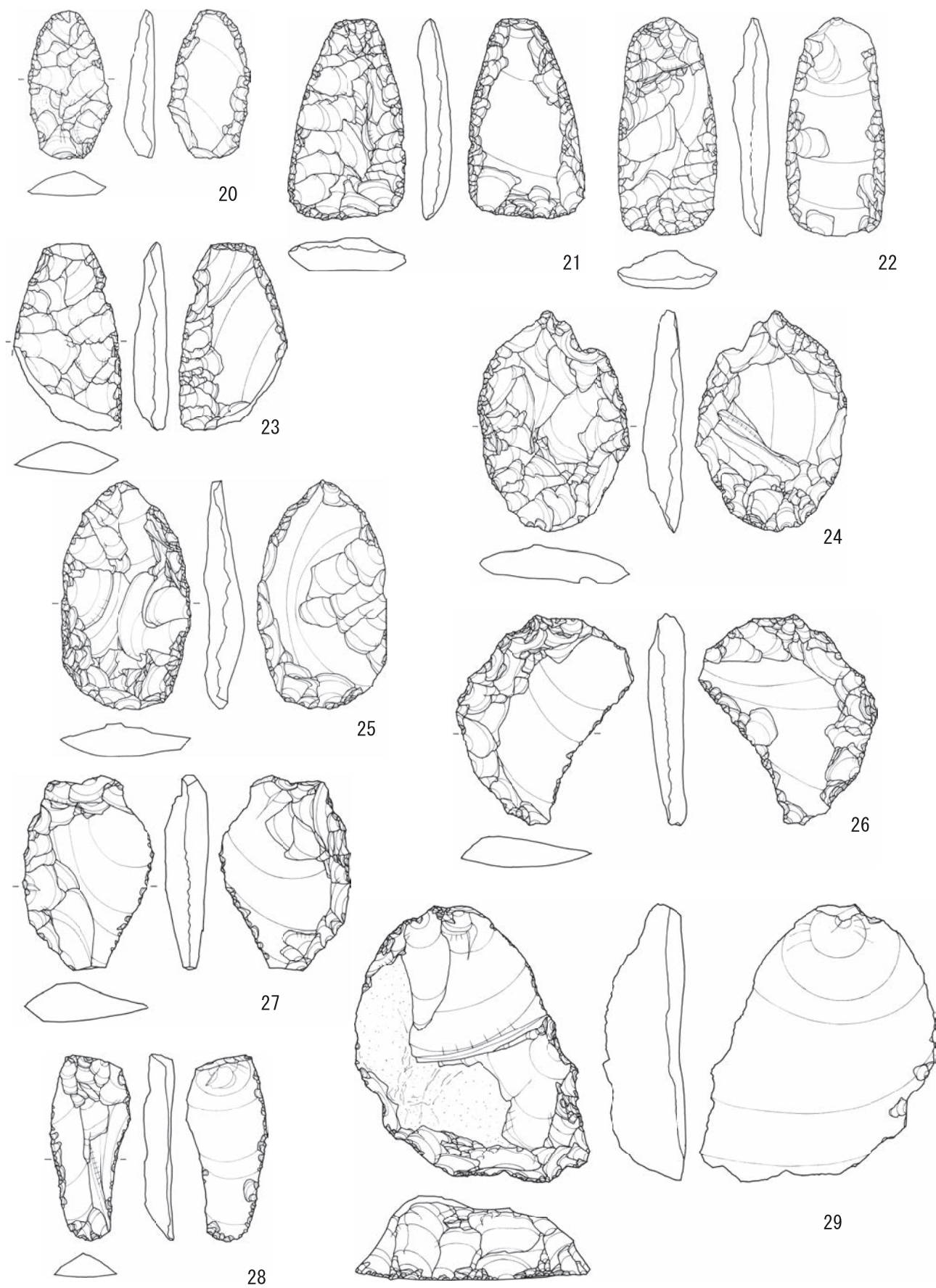


图IV-4 土器実測图(3)



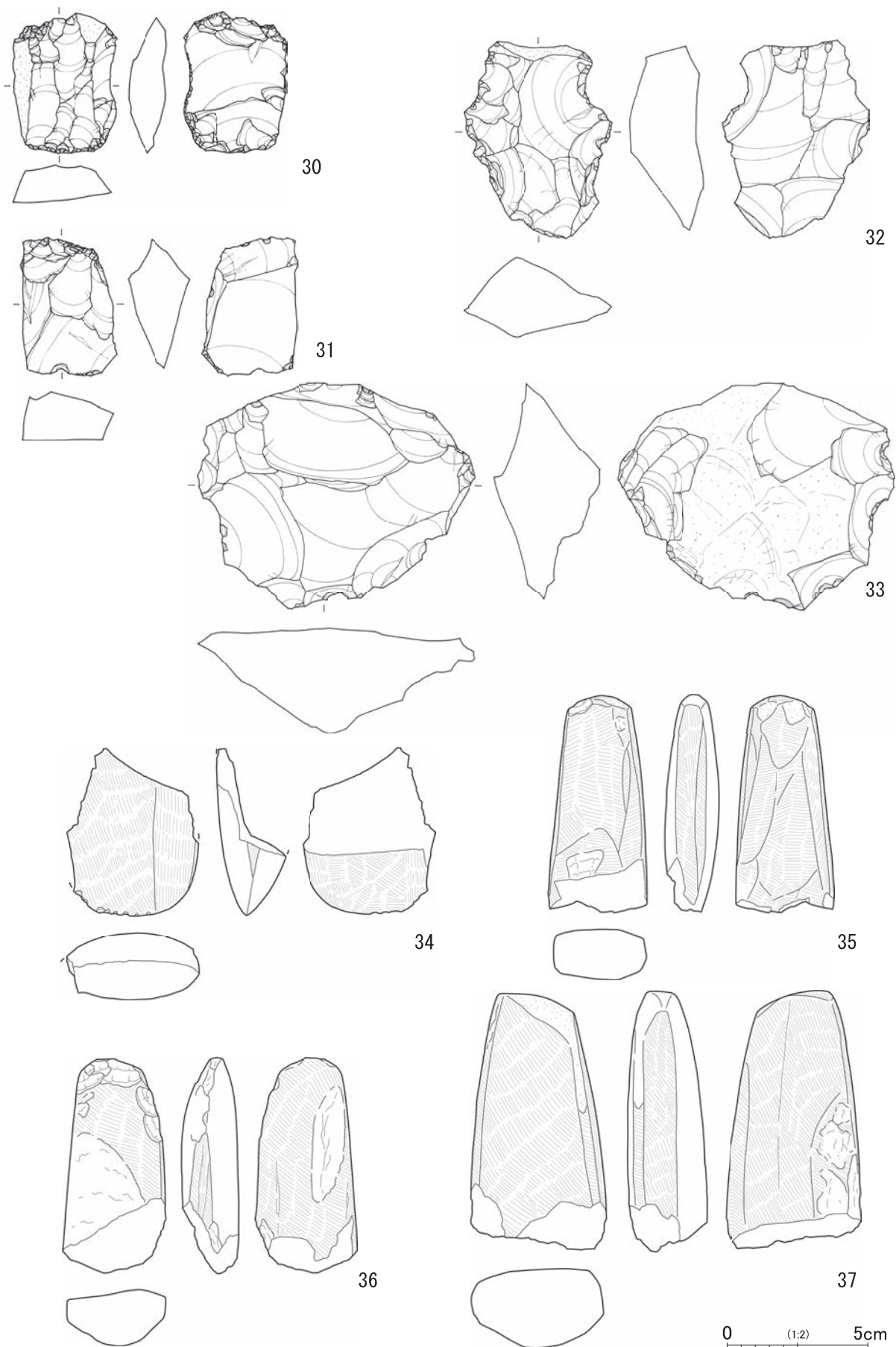
图IV-5 石器实测图(1)



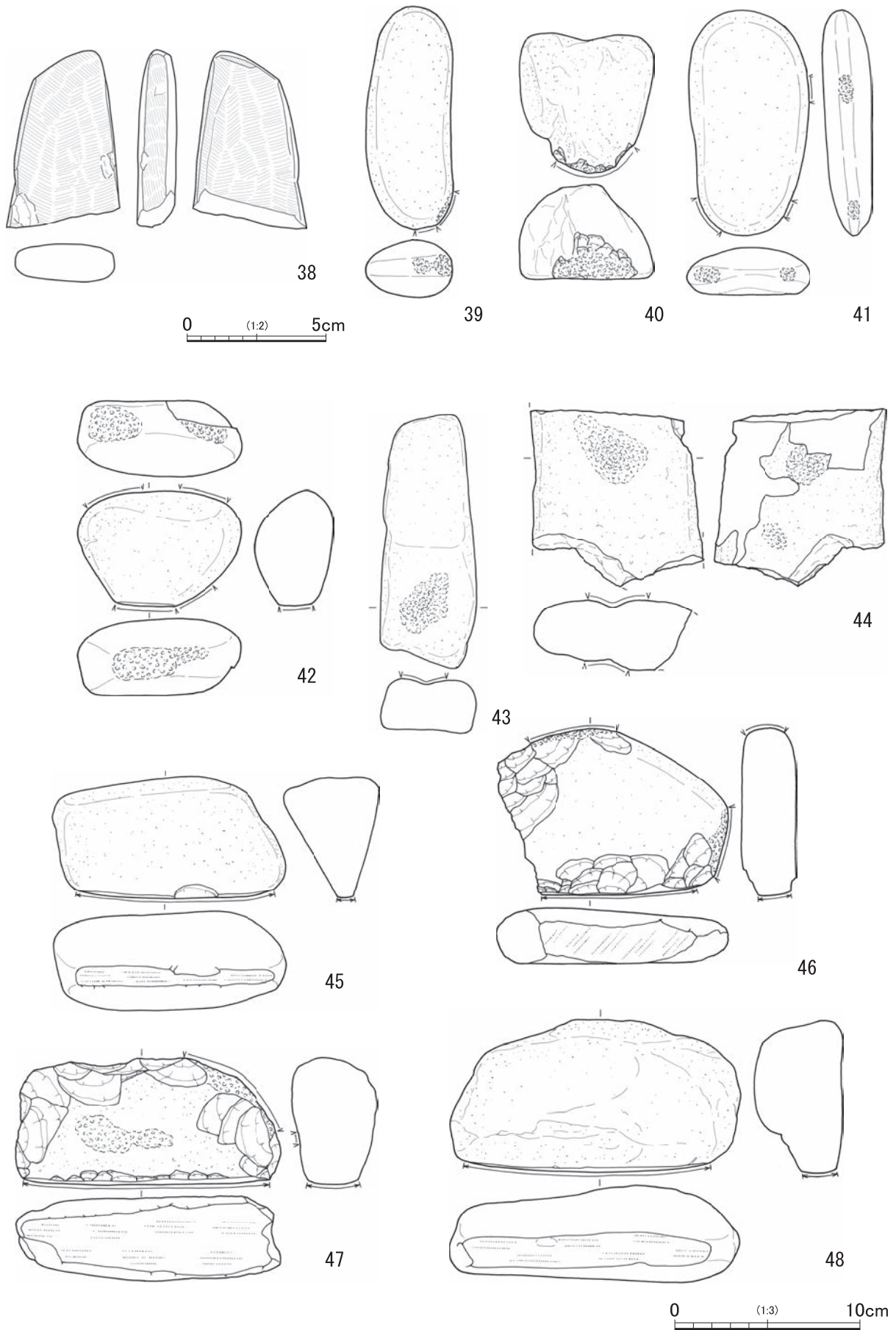


图IV—6 石器实测图(2)

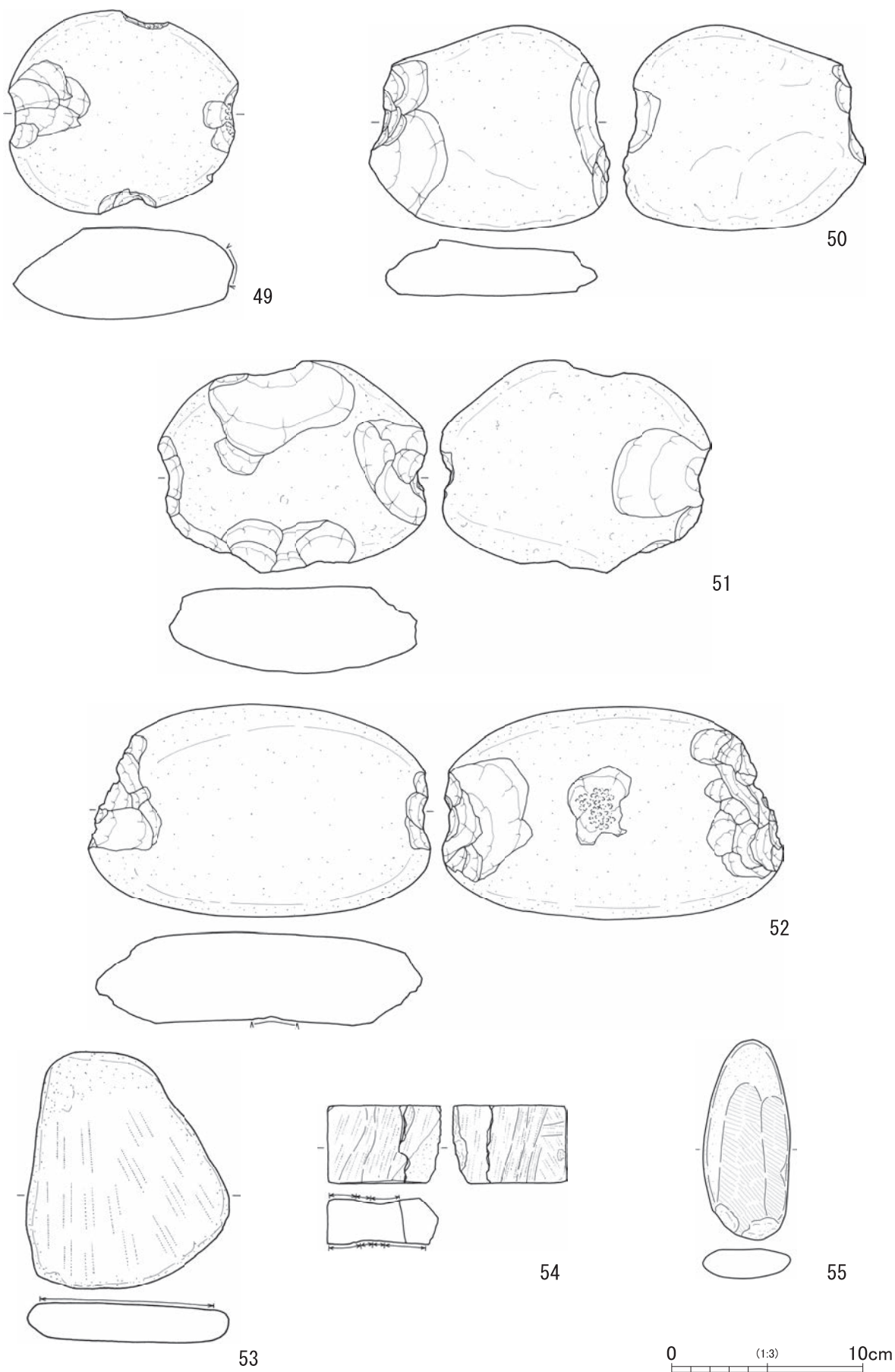
0 (1:2) 5cm



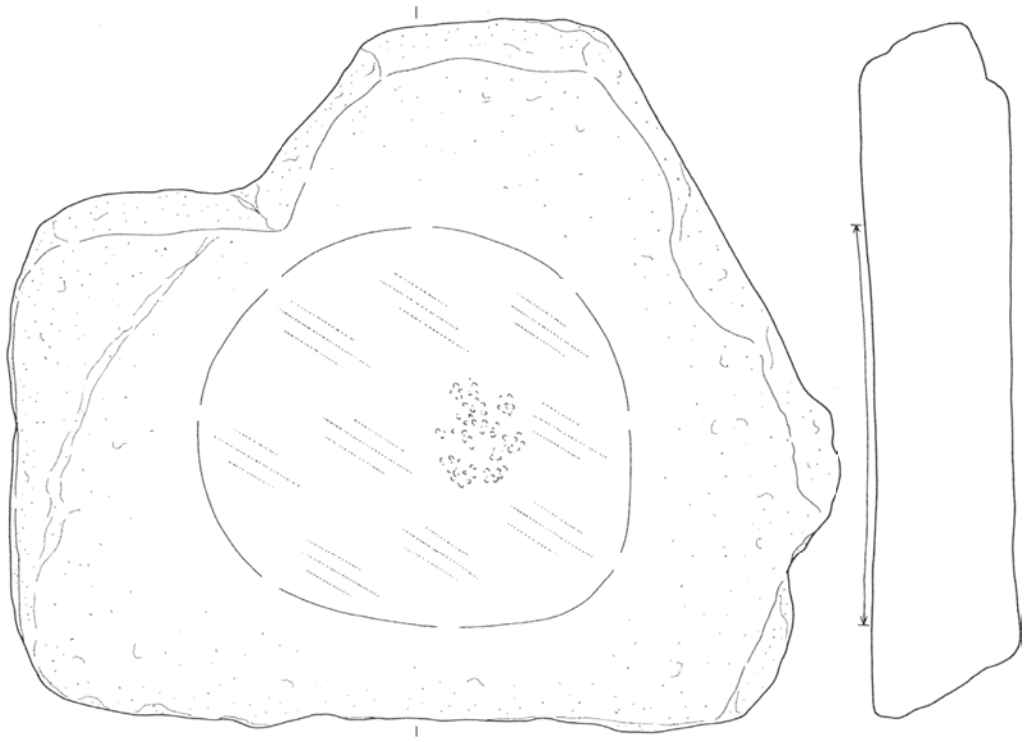
図IV-7 石器実測図(3)



图IV-8 石器实测图(4)



図IV-9 石器実測図(5)



56



57

0 (1:4) 20cm

图IV-10 石器实测图(6)

表Ⅳ-1 掲載土器一覧

掲載 番号	図版 番号	時 期	遺 構・ グリット	点数	層 位	分 類	器 種	部 位	口径	底径	器厚	地 文	備 考
1	18	早期後葉	D20	1	Ⅲb	I b-3	深鉢	口縁部	—	—	0.50	絡縄体圧痕文	コッタロ式
2	18	早期後葉	D20	4	Ⅲb	I b-3	深鉢	胴部	—	—	0.63	絡縄体圧痕文	コッタロ式
3	18	早期後葉	E17	2	Ⅲb	I b-3	深鉢	胴部	—	—	0.95	RL結束羽状	コッタロ式
4	18	早期後葉	F19	4	Ⅲb	I b-3	深鉢	胴部	—	—	0.62	絡縄体回転文	コッタロ式
5	18	早期後葉	F19	3	Ⅲb	I b-3	深鉢	胴部	—	—	0.62	絡縄体圧痕文	コッタロ式
6	18	早期後葉	D20	2	Ⅲb	I b-3	深鉢	底部	—	—	0.75	絡縄体圧痕文	コッタロ式
7	18	早期後葉	F19	11	Ⅲa, Ⅲb	I b-3	深鉢	底部	—	7.7	0.63	LR	コッタロ式
8	18	後期前葉	D20	2	Ⅲa	Ⅳa	深鉢	口縁部	—	—	0.67	L	
9	18	後期前葉	D20	2	Ⅲa	Ⅳa	深鉢	口縁部	—	—	0.65		
10	18	後期前葉	D20	1	Ⅲa	Ⅳa	深鉢	口縁部	—	—	0.62	LR・結節縄文	同一個体
11	18	後期前葉	C19	1	Ⅱ	Ⅳa	深鉢	口縁部	—	—	0.65		
12	18	後期前葉	D20	2	Ⅲa	Ⅳa	深鉢	口縁部	—	—	0.67	RL・結節縄文	
13	18	後期前葉	C20	2	Ⅱ	Ⅳa	壺状深鉢	口縁部	—	—	0.61	RL・短刻線	同一個体
14	18	後期前葉	D19・D20	3	Ⅱ, Ⅲa	Ⅳa	壺状深鉢	口縁部	—	—	0.51	沈線	
15	18	後期前葉	D19	2	Ⅲa	Ⅳa	鉢	口縁部	—	—	0.46	RL・沈線	
16	18	後期前葉	J16	3	Ⅲa	Ⅳa	深鉢	口縁部	—	—	0.74	結束羽状	
17	18	後期前葉	H17	1	Ⅲa	Ⅳa	深鉢	口縁部	—	—	0.65	RL	
18	18	後期前葉	C20	2	Ⅱ, Ⅲ	Ⅳa	深鉢	口縁部	—	—	0.41	L撚糸	
19	18	後期前葉	K16	1	Ⅲa	Ⅳa	深鉢	胴部	—	—	0.65	L撚糸	
20	18	後期前葉	F19	1	Ⅱ	Ⅳa	深鉢	口縁部	—	—	0.55	LR・縄線	
21	18	後期前葉	D20	1	Ⅱ	Ⅳa	深鉢	口縁部	—	—	0.63	LR・貼付文	
22	18	後期前葉	H19	1	Ⅲa	Ⅳa	鉢	口縁部	—	—	0.57	円形刺突文	
23	18	後期前葉	C21	1	Ⅱ	Ⅳa	深鉢	口縁部	—	—	0.58	LR・縄線	
24	19	後期前葉	H19	1	Ⅲa	Ⅳa	深鉢	口縁部	—	—	0.64	LR・貼付文	
25	19	後期前葉	I18	9	Ⅲa, Ⅲb	Ⅳa	深鉢	口縁部	14.7	—	0.52	LR	
26	19	後期前葉	I16	17	Ⅲa, Ⅲb	Ⅳa	深鉢	口縁部	—	—	0.84		同一個体
27	19	後期前葉	I16	6	Ⅲa	Ⅳa	深鉢	口縁部	—	—	0.85		
28	19	後期前葉	K17	6	Ⅲ	Ⅳa	深鉢	口縁部	—	—	0.67		
29	19	後期前葉	I16・J15	6	Ⅲ, Ⅲa	Ⅳa	深鉢	口縁部	—	—	0.85	LR・凹帯	同一個体
30	20	後期前葉	K17	18	Ⅲa	Ⅳa	深鉢	胴部	—	—	0.84		
31	20	後期前葉	D20・D22	5	Ⅱ, Ⅲa	Ⅳa	深鉢	口縁部	—	—	0.67	LR	
32	20	後期前葉	J16・J16	9	Ⅲa, Ⅲb	Ⅳa	深鉢	口縁部	—	—	0.64	LR	
33	20	後期前葉	C20	3	Ⅱ	Ⅳa	深鉢	口縁部	—	—	0.81	RL	
34	20	後期前葉	G18	1	Ⅱ	Ⅳa	深鉢	口縁部	—	—	0.92	LR	
35	20	後期前葉	C20	2	Ⅲa	Ⅳa	深鉢	口縁部	—	—	0.91	RLR	
36	20	後期前葉	F19	2	Ⅲa	Ⅳa	深鉢	口縁部	—	—	0.71	LR	
37	20	後期前葉	D22	1	Ⅱ	Ⅳa	深鉢	口縁部	—	—	0.72	LR	
38	20	後期前葉	C20	1	Ⅱ	Ⅳa	深鉢	口縁部	—	—	0.71	LRL	
39	20	後期前葉	J16	1	Ⅲa	Ⅳa	壺状深鉢	口縁部	—	—	0.64	RL	
40	20	後期前葉	F-7	3	焼土	Ⅳa	深鉢	口縁部	—	—	0.67		同一個体
41	20	後期前葉	F-7	3	焼土	Ⅳa	深鉢	口縁部	—	—	0.75	LR・縄線	
42	21	後期前葉	C17	1	Ⅱ	Ⅳa	深鉢	胴部	—	—	0.78	RL	
43	21	後期前葉	D20	1	Ⅱ	Ⅳa	深鉢	胴部	—	—	0.84	RL	
44	21	後期前葉	I21	1	Ⅳ	Ⅳa	深鉢	胴部	—	—	0.87	RL	
45	21	後期前葉	I19	2	Ⅲa	Ⅳa	深鉢	胴部	—	—	0.81	RL	
46	21	後期前葉	I20	1	Ⅲa	Ⅳa	深鉢	胴部	—	—	0.81	RL	
47	21	後期前葉	E20	1	Ⅱ	Ⅳa	深鉢	胴部	—	—	0.71	絡縄体回転文	
48	21	後期前葉	K17	14	Ⅲa	Ⅳa	深鉢	胴部	—	—	0.56	LR	
49	21	後期前葉	K16	5	Ⅲa	Ⅳa	深鉢	胴～底部	—	—	0.69	LR	
50	21	後期前葉	J17	7	Ⅲa	Ⅳa	深鉢	底部	—	5.3	0.57	RL	底部に葉脈痕
51	21	後期前葉	C21	1	Ⅱ	Ⅳa	深鉢	底部	—	4.0	0.70	RL	
52	21	後期前葉	H19	13	Ⅲa	Ⅳa	深鉢	底部	—	3.9	0.67	無文	
53	22	後期前葉	C21	1	Ⅱ	Ⅳa	深鉢	底部	—	—	0.77	LR	
54	22	後期前葉	J16	1	Ⅲa	Ⅳa	深鉢	底部	—	3.8	0.76	RL	
55	22	後期前葉	J7・I17	3	Ⅲa	Ⅳa	深鉢	底部	—	6.5	0.50	L	
56	22	後期前葉	C20	3	Ⅱ	Ⅳa	深鉢	底部	—	—	0.94	RL	
57	22	後期前葉	P-1	10	覆土, Ⅲa	Ⅳa	深鉢	底部	—	13.2	1.13	RL	底部に縄文

表IV-2 掲載石器一覧

掲載番号	図版番号	グリッド	層位	器種	石材	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)	備考
1	22	C18	Ⅲb	石鏃	頁岩	3.1	1.0	0.3	0.83	縄文時代早期
2	22	C20	Ⅲb	石鏃	頁岩	2.1	1.2	0.5	1.36	縄文時代早期
3	22	D21	Ⅲb	石鏃	黒曜石	4.4	1.4	0.4	2.36	縄文時代早期
4	22	F19	風倒木	石鏃	黒曜石	(3.3)	1.3	0.3	1.22	縄文時代早期
5	22	D16	Ⅲb	石鏃	黒曜石	(3.5)	1.4	0.4	2.0	縄文時代早期
6	22	H15	Ⅲa	石鏃	頁岩	3.5	1.4	0.7	2.79	
7	22	I17	Ⅲa	石鏃	頁岩	3.9	1.6	0.6	2.74	
8	22	C21	Ⅱ	石鏃	頁岩	4.1	1.8	0.6	3.84	
9	22	C20	Ⅲa	石鏃	頁岩	3.8	1.6	0.8	2.62	
10	22	J16	Ⅲa	石鏃	頁岩	(5.8)	(4.0)	(1.5)	24.64	
11	22	I17	Ⅲa	石鏃	頁岩	4.9	4.3	1.1	16.84	
12	22	J17	Ⅲa	石鏃	頁岩	5.3	5.2	1.5	25.44	
13	22	C20	Ⅲb	つまみ付ナイフ	頁岩	5.3	2.1	0.5	5.44	縄文時代早期
14	22	D18	Ⅲb	つまみ付ナイフ	頁岩	5.5	3.4	0.6	7.51	縄文時代早期
15	22	C20	Ⅲb	つまみ付ナイフ	頁岩	5.8	3.5	0.6	10.75	縄文時代早期
16	22	D21	Ⅲb	つまみ付ナイフ	頁岩	7.4	3.2	1.0	15.15	縄文時代早期
17	22	C20	Ⅲb	つまみ付ナイフ	頁岩	8.1	4.7	0.8	22.90	縄文時代早期
18	22	K17	Ⅲ	両面調整石器	頁岩	7.8	2.8	1.1	23.52	
19	22	C20	Ⅲa	ヘラ状石器	頁岩	10.0	4.4	1.3	50.19	縄文時代早期
20	23	C20	Ⅲb	ヘラ状石器	頁岩	5.4	3.0	1.2	16.64	縄文時代早期
21	23	C20	Ⅲa	ヘラ状石器	頁岩	7.3	4.2	1.2	32.05	縄文時代早期
22	23	C20	Ⅲb	ヘラ状石器	頁岩	7.9	3.6	1.3	27.53	縄文時代早期
23	23	D19	Ⅲb	ヘラ状石器	頁岩	6.8	3.9	1.3	33.2	縄文時代早期
24	23	D18	Ⅱ	両面調整石器	頁岩	8.0	5.5	1.4	57.66	
25	23	C20	Ⅲa	両面調整石器	頁岩	8.3	4.7	1.5	48.76	
26	23	E20	Ⅱ	スクレイパー	頁岩	7.6	6.5	1.4	51.17	
27	23	L16	Ⅲa	スクレイパー	頁岩	7.0	4.8	1.5	44.11	
28	23	F19	Ⅲa	スクレイパー	頁岩	6.8	2.9	1.1	18.25	
29	23	F19	Ⅲa	スクレイパー	頁岩	10.0	8.5	3.1	232	
30	23	C20	Ⅲa	くさび型石器	頁岩	5.0	3.6	1.4	27.02	縄文時代早期
31	23	C17	Ⅲa	くさび型石器	頁岩	4.9	3.3	2.3	31.40	縄文時代早期
32	23	D19	Ⅲa	石核	頁岩	6.9	5.2	2.8	77.4	
33	23	E19	Ⅲa	石核	頁岩	8.0	9.8	3.8	203	
34	23	C20	Ⅲa	石斧	片岩	(5.9)	(4.5)	(2.4)	(48.93)	
35	23	I18	Ⅲa	石斧	片岩	7.6	3.5	2.0	85.66	
36	23	C20	Ⅲb	石斧	蛇紋岩	(7.6)	(3.5)	(2.0)	(74.77)	
37	23	C19	Ⅲb	石斧	輝緑岩	(9.2)	(4.8)	(2.9)	(189)	
38	23	H19	Ⅲa	石斧	緑色泥岩	(6.4)	(4.0)	(1.4)	(53.25)	
39	24	C18	Ⅲb	たたき石	砂岩	11.9	4.6	3.1	245	
40	24	G18	Ⅱ	たたき石	泥岩	7.5	7.1	5.1	362	
41	24	D19	Ⅲa	たたき石	砂岩	12.1	6.3	2.6	279	
42	24	C20	Ⅲb	たたき石	砂岩	6.3	8.7	4.2	306	
43	24	H18	Ⅲa	くぼみ石	泥岩	13.6	5.1	3.3	261	
44	24	D22	Ⅱ	くぼみ石	安山岩	(9.5)	(9.1)	(3.8)	(347)	
45	24	C20	Ⅲb	すり石	砂岩	6.5	12.3	5.0	472	
46	24	C16	Ⅱ	すり石	安山岩	9.0	12.2	3.0	516	
47	24	I18	Ⅲa	すり石	閃緑岩	6.8	14.1	4.6	710	
48	24	F19	Ⅲa	すり石	玄武岩	8.2	15.4	5.3	836	
49	25	D21	Ⅲb	石錘	砂岩	10.6	11.5	4.8	824	縄文時代早期
50	25	D19	Ⅲb	石錘	安山岩	10.6	12.6	3.0	451	縄文時代早期
51	25	D20	Ⅲb	石錘	玄武岩	11.0	14.0	4.4	843	縄文時代早期
52	25	I21	Ⅲa	石錘	閃緑岩	11.0	17.8	4.8	1475	
53	25	J16	Ⅲ	砥石	砂岩	12.4	10.4	2.2	303	
54	25	C22	Ⅱ	砥石	凝灰岩	4.0	5.8	2.6	93.86	現代の遺物
55	25	C21	Ⅲa	砥石	安山岩	10.4	4.5	1.5	100	
56	26	F19	風倒木	石皿	安山岩	43.8	36.8	3.5	200500	縄文時代早期
57	26	F19	風倒木	石皿	安山岩	52.5	41.7	10.0	300500	縄文時代早期

## V 自然科学的分析

### 1 泉沢6遺跡出土黒曜石製石器の産地推定

パレオ・ラボ

#### 1. はじめに

本古内町に所在する泉沢6遺跡から出土した縄文時代早期の黒曜石製石鏃について、エネルギー分散型蛍光X線分析装置による元素分析を行い、産地を推定した。

#### 2. 試料と方法

分析対象は、黒曜石製石鏃6点 (IZ6-X 1~6) である (表V-1)。時期は、縄文時代早期とみられている。試料は、測定前にメラミンフォーム製スポンジを用いて、測定面の表面の洗浄を行った。

分析装置は、エスアイアイ・ナノテクノロジー株式会社製のエネルギー分散型蛍光X線分析計SEA1200VXを使用した。装置の仕様は、X線管ターゲットはロジウム (Rh)、X線検出器はSDD検出器である。測定条件は、測定時間100sec、照射径8mm、電圧50kV、電流1000μA、試料室内雰囲気は真空に設定し、一次フィルタにPb測定用を用いた。

黒曜石の産地推定には、蛍光X線分析によるX線強度を用いた黒曜石産地推定法である判別図法を用いた (望月, 1999など)。本方法では、まず各試料を蛍光X線分析装置で測定し、その測定結果のうち、カリウム (K)、マンガン (Mn)、鉄 (Fe)、ルビジウム (Rb)、ストロンチウム (Sr)、イットリウム (Y)、ジルコニウム (Zr) の合計7元素のX線強度 (cps; count per second) について、以下に示す指標値を計算する。

黒曜石の産地推定には、蛍光X線分析によるX線強度を用いた黒曜石産地推定法である判別図法を用いた (望月, 1999など)。

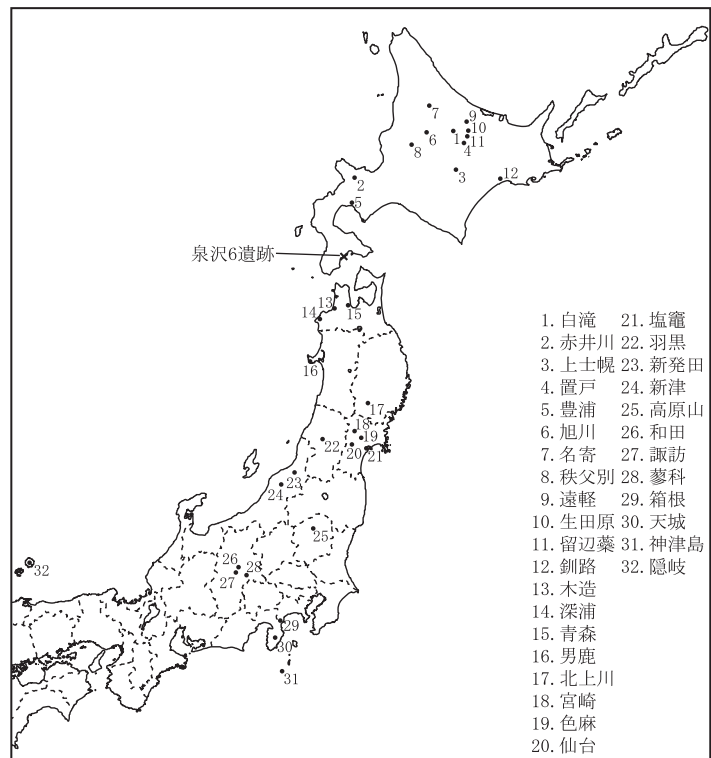
まず各試料を蛍光X線分析装置で測定し、その測定結果のうち、カリウム (K)、マンガン (Mn)、鉄 (Fe)、ルビジウム (Rb)、ストロンチウム (Sr)、イットリウム (Y)、ジルコニウム (Zr) の合計7元素のX線強度 (cps; count per second) について、以下に示す指標値を計算する。

- 1)  $Rb\text{分率} = Rb\text{強度} \times 100 / (Rb\text{強度} + Sr\text{強度} + Y\text{強度} + Zr\text{強度})$
- 2)  $Sr\text{分率} = Sr\text{強度} \times 100 / (Rb\text{強度} + Sr\text{強度} + Y\text{強度} + Zr\text{強度})$
- 3)  $Mn\text{強度} \times 100 / Fe\text{強度}$
- 4)  $\log (Fe\text{強度} / K\text{強度})$

そして、これらの指標値を用いた2つの判別図 (横軸Rb分率-縦軸Mn強度×100/Fe強度の判別図と横軸Sr分率-

表V-1 分析対象

番号	器種	発掘区	層位	遺物番号	重量 (g)	時期
IZ6-X 1	石鏃	D-21	II	1	2.38	縄文時代早期
IZ6-X 2	石鏃 基部	D-21	II	2	0.69	縄文時代早期
IZ6-X 3	石鏃 先端欠	D-16	II	3	2.00	縄文時代早期
IZ6-X 4	石鏃 先端欠	F-19	II	4	1.22	縄文時代早期
IZ6-X 5	石鏃 基部	C-18	III	5	0.64	縄文時代早期
IZ6-X 6	石鏃 体部	C-18	II	6	0.78	縄文時代早期



図V-1 黒曜石原産地分布図 (東日本)



縦軸log (Fe強度/K強度) の判別図を作成し、各地の原石データと遺跡出土遺物のデータを照合して、産地を推定する。この方法は、できる限り蛍光X線のエネルギー差が小さい元素同士を組み合わせて指標値を算出するため、形状、厚み等の影響を比較的受けにくく、原則として非破壊分析が望ましい考古遺物の測定に対して非常に有効な方法であるといえる。ただし、風化試料の場合、log (Fe強度/K強度) の値が減少する(望月, 1999)。試料の測定面にはなるべく平滑な面を選んだ。

原石試料は、採取原石を割って新鮮な面を露出させた上で、産地推定対象試料と同様の条件で測定した。表V-2に判別群一覧とそれぞれの原石の採取地点および点数を、図V-1に各原石の採取地の分布図を示す。

### 3. 分析結果

表V-3に石鏃の測定値および算出した指標値を、図V-2と図V-3に黒曜石原石の判別図に石鏃の指標値をプロットした図を示す。視覚的にわかりやすくするため、図では各判別群を楕円で取り囲んだ。

分析の結果、6点いずれも赤井川群(北海道、赤井川エリア)の範囲にプロットされた。

なお、赤井川群と上士幌群の図V-2、3の判別図は、一部重複があるため、区別が困難な場合がある。そこで、以下に示すY分率を算出した。

$$Y分率 = Y強度 \times 100 / (Rb強度 + Sr強度 + Y強度 + Zr強度)$$

赤井川群および上士幌群の原石および石鏃について、横軸Y分率、縦軸Mn強度×100/Fe強度をプロットした判別図を図V-4に示す。図V-4においても、6点いずれも赤井川群と判断できる。表V-3に、判別図法により推定された判別群名とエリア名を示す。

表V-2 東日本黒曜石産地の判別群

都道府県	エリア	判別群名	原石採取地
北海道	白滝	白滝1	赤石山山頂(43), 八号沢露頭(15)
		白滝2	7の沢川支流(2), IK露頭(10), 十勝石沢露頭直下河床(11), アジサイの滝露頭(10)
	赤井川	赤井川	曲川・土木川(24)
	上士幌	上士幌	十勝三股(4), タウシユベツ川右岸(42), タウシユベツ川左岸(10), 十三ノ沢(32)
	置戸	置戸山	置戸山(5)
		所山	所山(5)
	豊浦	豊浦	豊泉(10)
	旭川	旭川	近文台(8), 雨紛台(2)
	名寄	名寄	忠烈布川(19)
	秩父別	秩父別1	中山(65)
		秩父別2	
		秩父別3	
	遠軽	遠軽	社名淵川河床(2)
	生田原	生田原	仁田布川河床(10)
	留辺蘂	留辺蘂1	ケシヨマップ川河床(9)
留辺蘂2			
釧路	釧路	釧路市営スキー場(9), 阿寒川右岸(2), 阿寒川左岸(6)	
青森	木造	出来島	出来島海岸(15), 鶴ヶ坂(10)
	深浦	八森山	岡崎浜(7), 八森山公園(8)
	青森	青森	天田内川(6)
秋田	男鹿	金ヶ崎	金ヶ崎温泉(10)
		脇本	脇本海岸(4)
岩手	北上川	北上折居1	北上川(9), 真城(33)
		北上折居2	
		北上折居3	
宮城	宮崎	湯ノ倉	湯ノ倉(40)
		根岸	根岸(40)
	仙台	秋保1	土蔵(18)
		秋保2	
塩竈	塩竈	塩竈(10)	
山形	羽黒	月山	月山荘前(24), 大越沢(10)
		櫛引	たらのき代(19)
新潟	新発田	板山	板山牧場(10)
	新津	金津	金津(7)
栃木	高原山	甘湯沢	甘湯沢(22)
		七尋沢	七尋沢(3), 宮川(3), 枝持沢(3)
長野	和田	西餅屋	芙蓉パーライト土砂集積場(30)
		鷹山	鷹山(14), 東餅屋(54)
		小深沢	小深沢(42)
		土屋橋1	土屋橋西(10)
		土屋橋2	新和田トンネル北(20), 土屋橋北西(58), 土屋橋西(1)
		古峠	和田峠トンネル上(28), 古峠(38), 和田峠スキー場(28)
		ブドウ沢	ブドウ沢(20)
		牧ヶ沢	牧ヶ沢下(20)
		高松沢	高松沢(19)
		諏訪	星ヶ台
蓼科	冷山	冷山(20), 麦草峠(20), 麦草峠東(20)	
神奈川	箱根	芦ノ湯	芦ノ湯(20)
		畑宿	畑宿(51)
		鍛冶屋	鍛冶屋(20)
静岡	天城	上多賀	上多賀(20)
		柏峠	柏峠(20)
東京	神津島	恩馳島	恩馳島(27)
		砂糠崎	砂糠崎(20)
鳥根	隠岐	久見	久見パーライト中(6), 久見採掘現場(5)
		箕浦	箕浦海岸(3), 加茂(4), 岸浜(3)

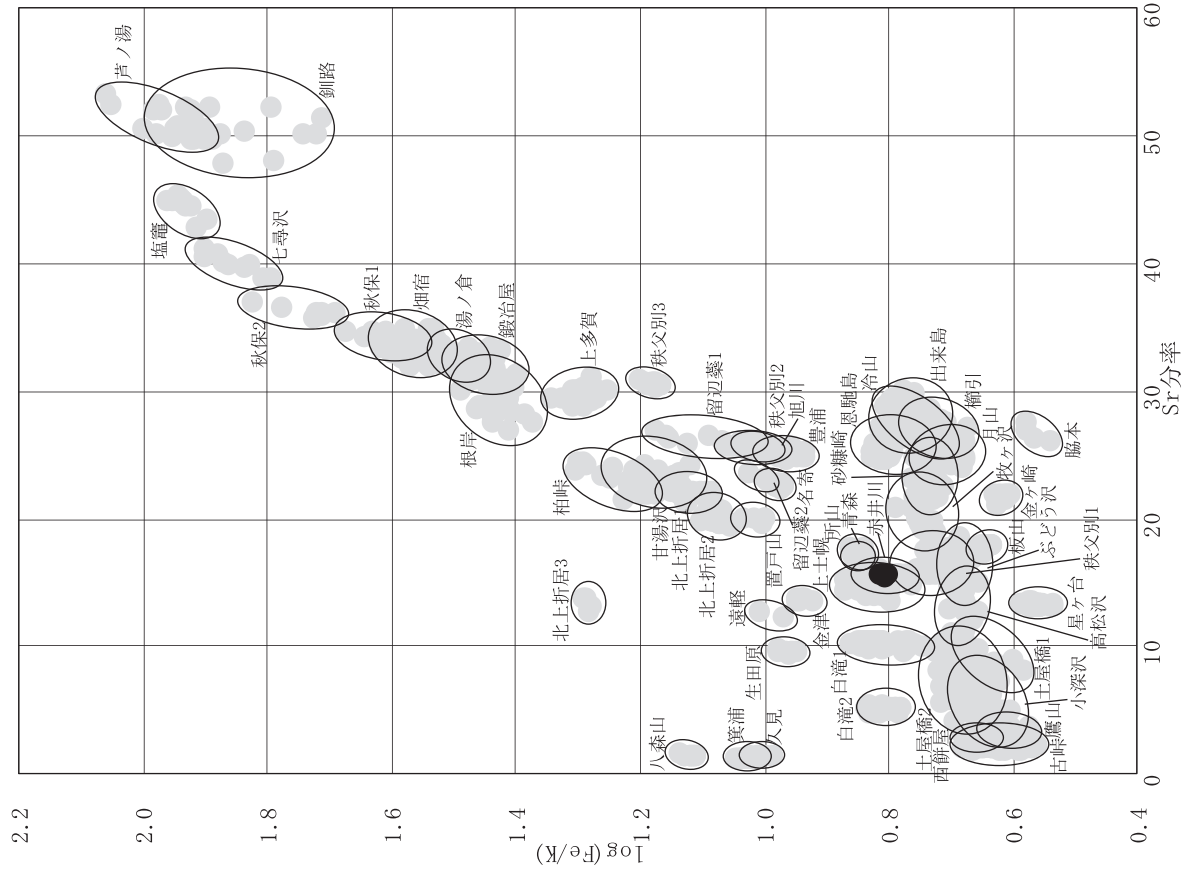


図 V-1 黒曜石産地推定判別図 (1)

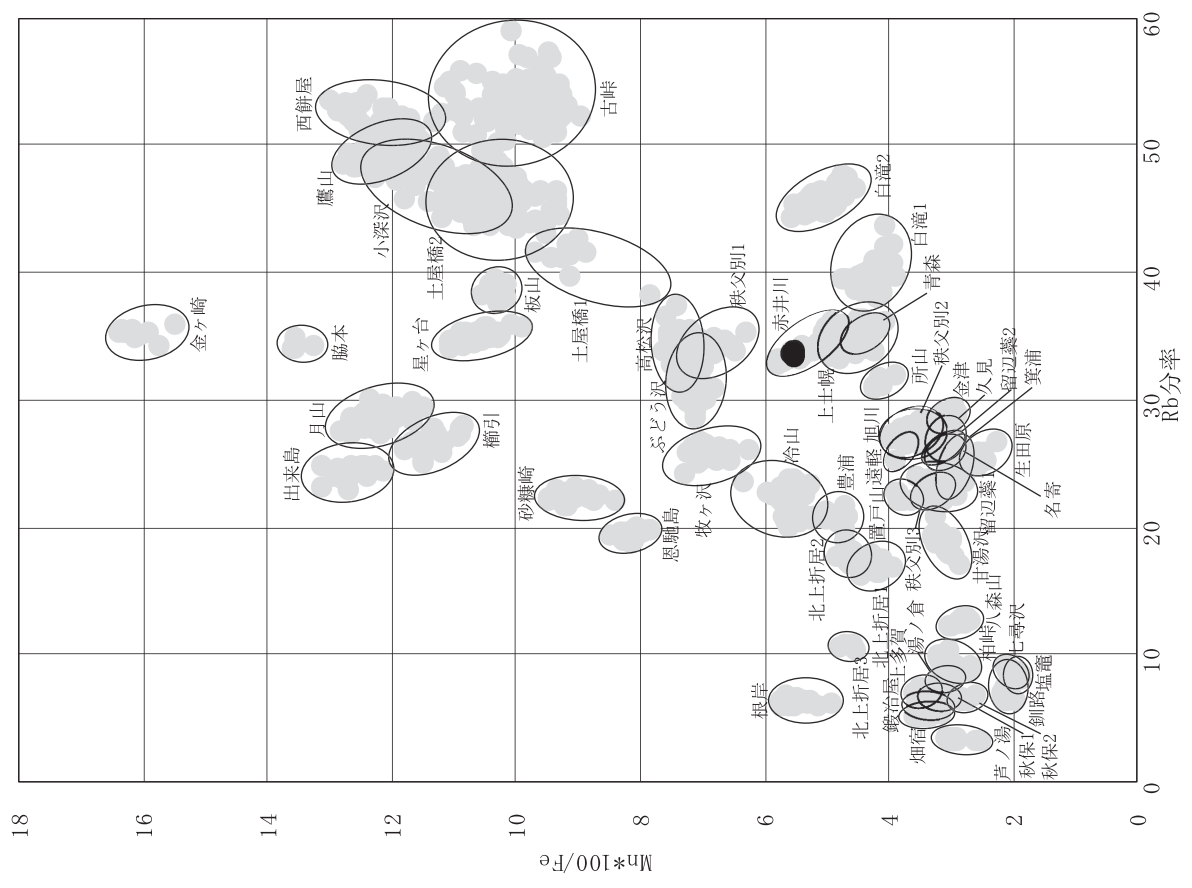


図 V-2 黒曜石産地推定判別図 (2)

表V-3 測定値および産地推定結果

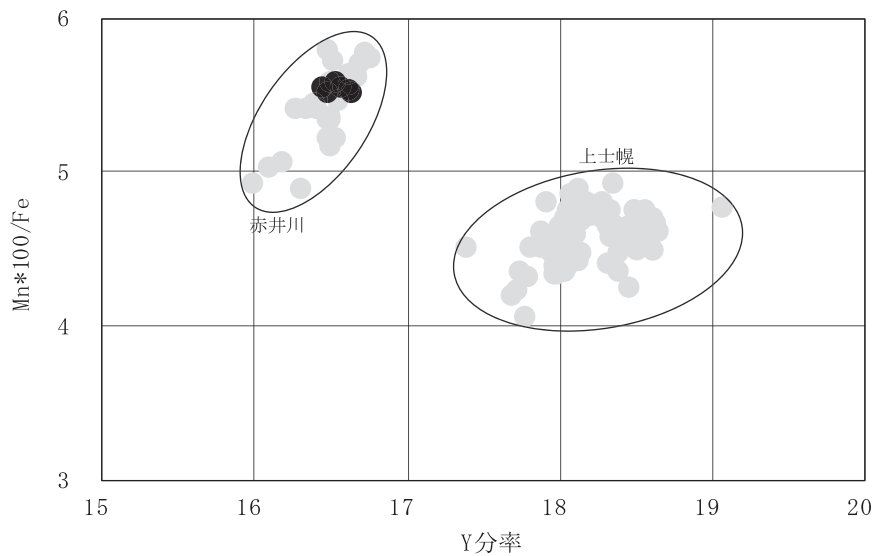
番号	K強度 (cps)	Mn強度 (cps)	Fe強度 (cps)	Rb強度 (cps)	Sr強度 (cps)	Y強度 (cps)	Zr強度 (cps)	Rb分率	Mn*100 Fe	Sr分率	log $\frac{Fe}{K}$	Y分率	判別群	エリア	番号
X1	308.5	108.8	1961.4	718.7	333.5	353.0	741.2	33.48	5.55	15.54	0.80	16.45	赤井川	赤井川	X1
X2	295.2	104.6	1891.0	735.1	337.1	360.8	738.6	33.85	5.53	15.52	0.81	16.61	赤井川	赤井川	X2
X3	299.6	107.7	1955.1	739.5	347.2	363.8	757.4	33.50	5.51	15.72	0.81	16.48	赤井川	赤井川	X3
X4	290.5	104.6	1875.0	731.0	340.5	360.0	746.4	33.57	5.58	15.63	0.81	16.53	赤井川	赤井川	X4
X5	275.1	98.2	1780.6	697.5	324.7	346.8	717.1	33.44	5.52	15.56	0.81	16.63	赤井川	赤井川	X5
X6	285.0	102.7	1851.0	725.1	335.3	357.2	738.1	33.64	5.55	15.55	0.81	16.57	赤井川	赤井川	X6

4. おわりに

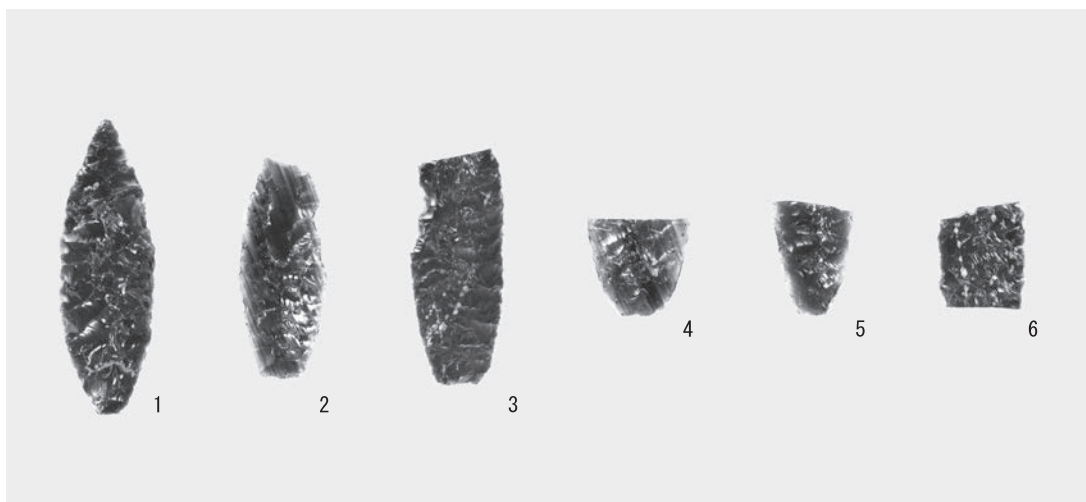
泉沢6遺跡より出土した縄文時代早期の黒曜石製石鏃6点について、蛍光X線分析による産地推定を行った結果、6点いずれも赤井川エリア産と推定された。

引用文献

望月明彦（1999）上和田城山遺跡出土の黒曜石産地推定. 大和市教育委員会編「埋蔵文化財の保管と活用のための基礎的整理報告書2-上和田城山遺跡篇一」：172-179, 大和市教育委員会.



図V-4 黒曜石産地推定判別図（3）



図版V-1 黒曜石製石器原材料産地分析資料

# 写真図版



調査状況 S → N



調査状況 S → N



調査状況 NW → SE



調査状況 E → W



Ⅲ層遺物出検出作業 E → W



風倒木根痕遺物出土状況 SE → NW



基本土層 (C19) NW → SE



基本土層 (C20) NW → SE





調査終了状況（Eライン以北）SE → NW



調査終了状況（Eライン以南）NE → SW



調査区遠景 W → E



調査状況 N → S



調査状況 (I19) N → S



V層上面検出作業 (H16) E → W



土器検出作業 (I16・Ⅲ a 層) SW → NE



土器出土状況 (I16・Ⅲ a 層) NW → SE



土器出土状況 (H19・Ⅲ a 層) E → W



土器出土状況 (I17・Ⅲ a 層) SE → NW



土器出土状況 (J16・Ⅲ a 層) E → W



土器出土状況 (K17・Ⅲ a 層) E → W



フレイクチップ検出作業 (K13・Ⅲ a 層) S → N



調査終了状況 E → W



調査状況 E → W



上面遺物遺物状況 NE → SW



土層断面 NW → SE

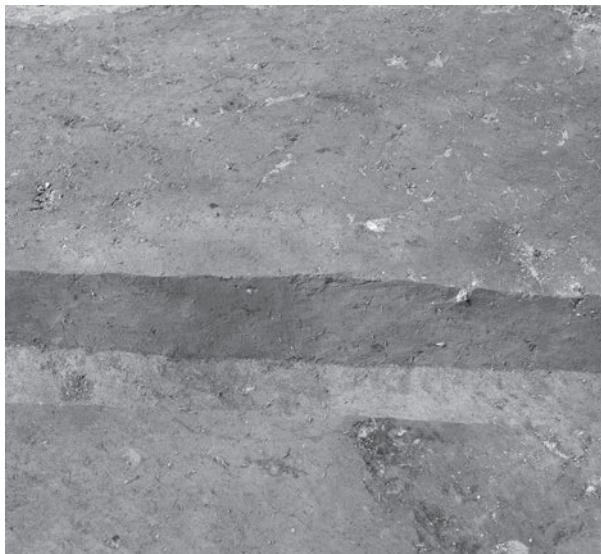


完掘 S → N

P - 1 ( 2 )



F - 1 検出状況 SW → NE



F - 1 土層断面 S → N



F - 2 検出状況 NW → SE



F - 2 土層断面 W → E



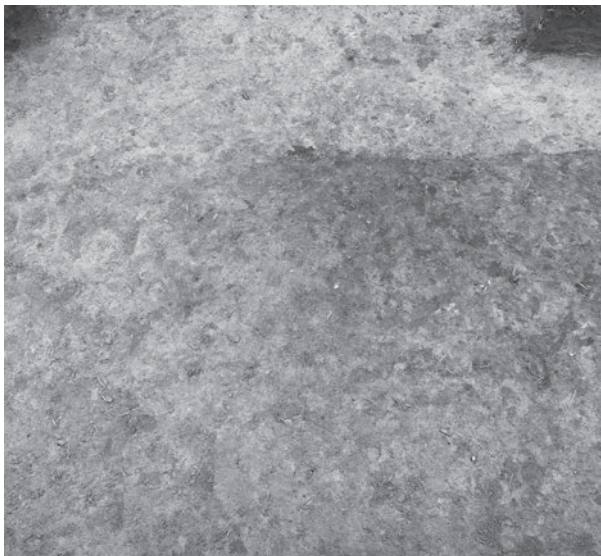
F - 3 検出状況 NW → SE



F - 3 土層断面 N → S

F - 1 · 2 · 3

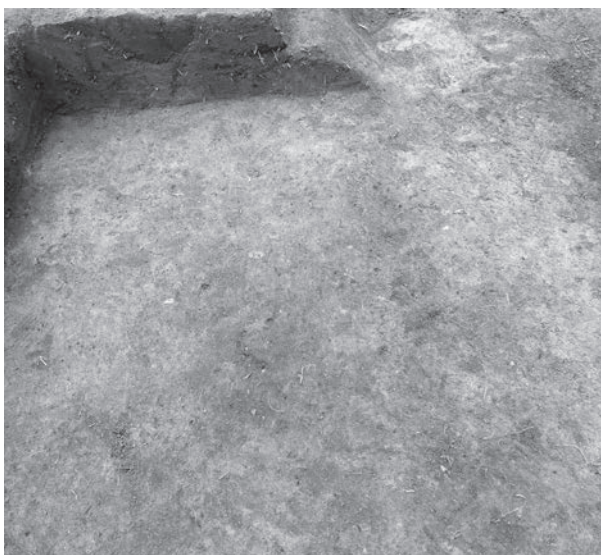




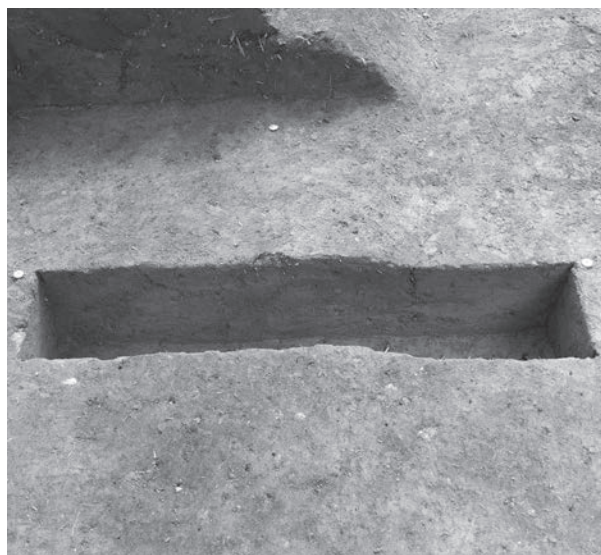
F - 4 検出状況 NW → SE



F - 4 土層断面 SW → NE



F - 5 検出状況 E → W



F - 5 土層断面 E → W



F - 6 検出状況 NW → SE



F - 6 土層断面 W → E

F - 4 ・ 5 ・ 6



調査状況 W → E



検出状況 E → W



土層断面 SE → NW



周辺確認状況 SE → NW

F - 8 ( 2 )



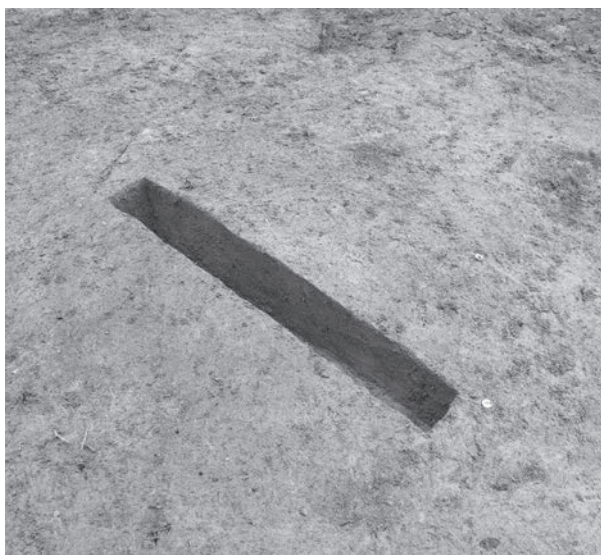
F - 7 調査状況 SE → NW



F - 7 土層断面 SE → NW



F - 9 検出状況 NE → SW



F - 9 土層断面 W → E



F - 11 検出状況 NE → SW



F - 11 土層断面 E → W



F - 1 2 検出状況 NW → SE



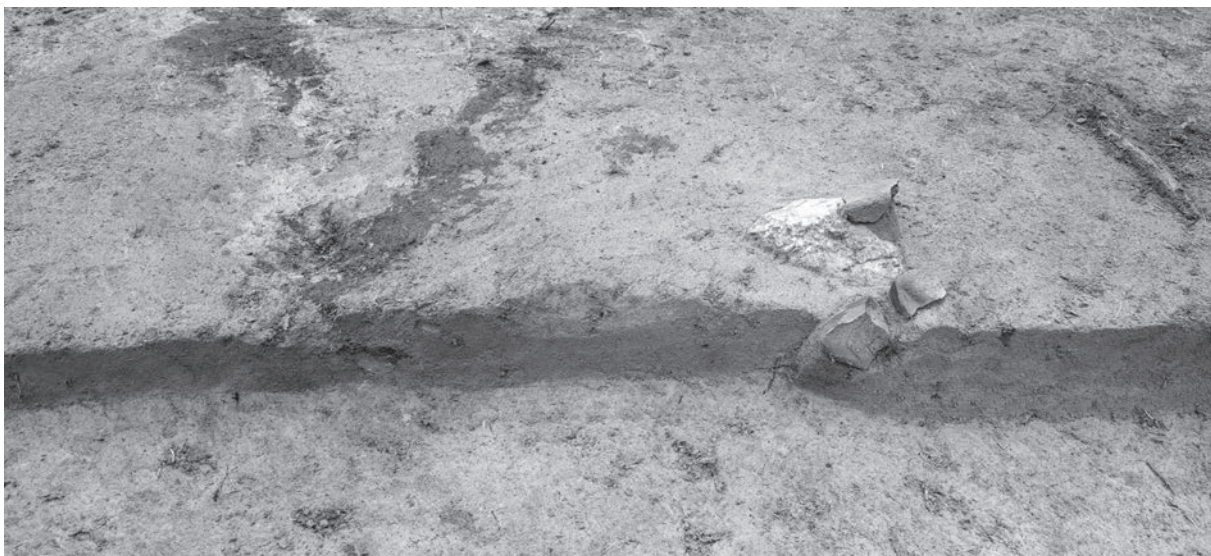
F - 1 2 土層断面 SW → NE



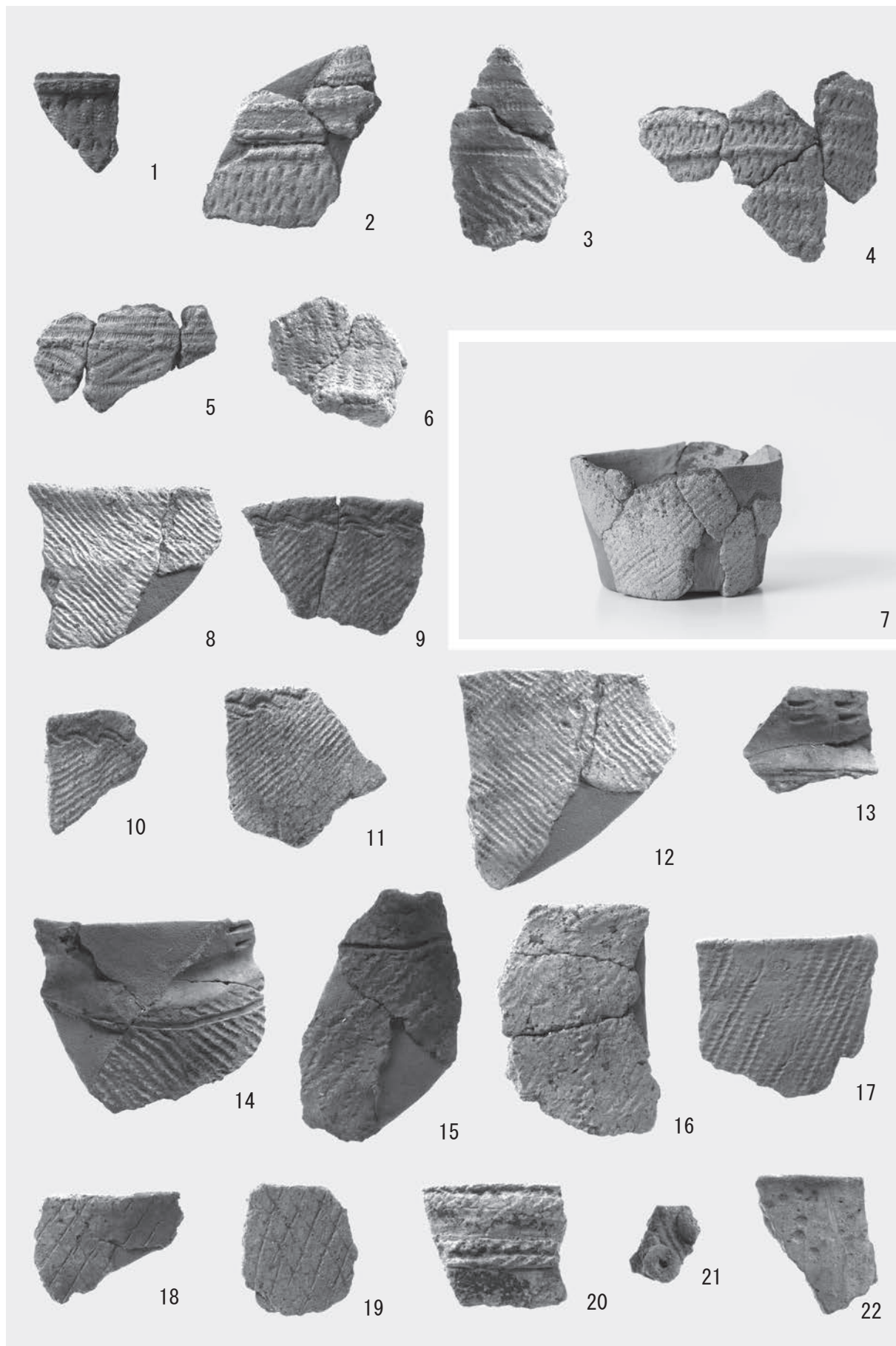
F - 1 3 検出状況 S → N



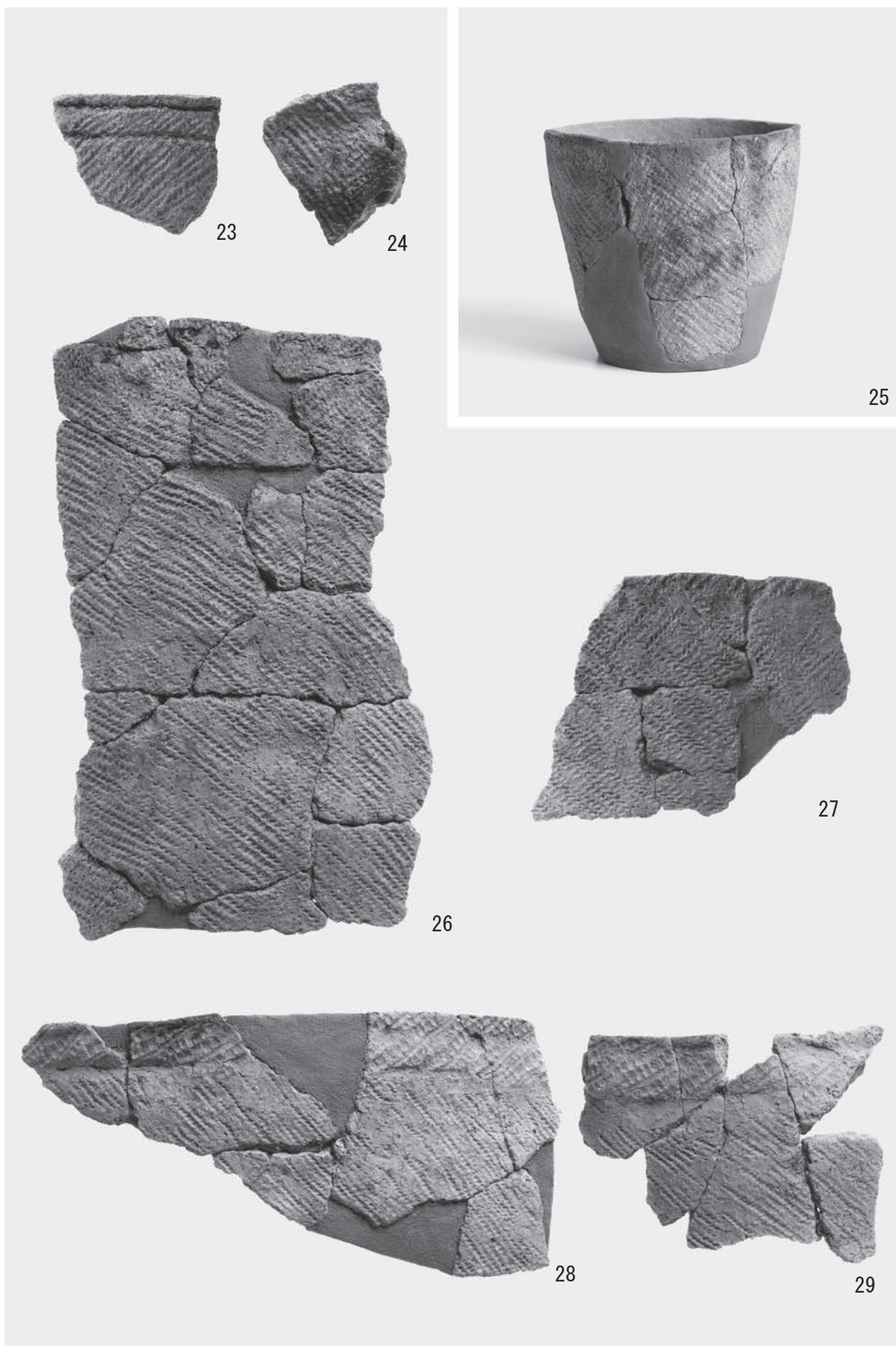
F - 1 3 土層断面 SE → NW



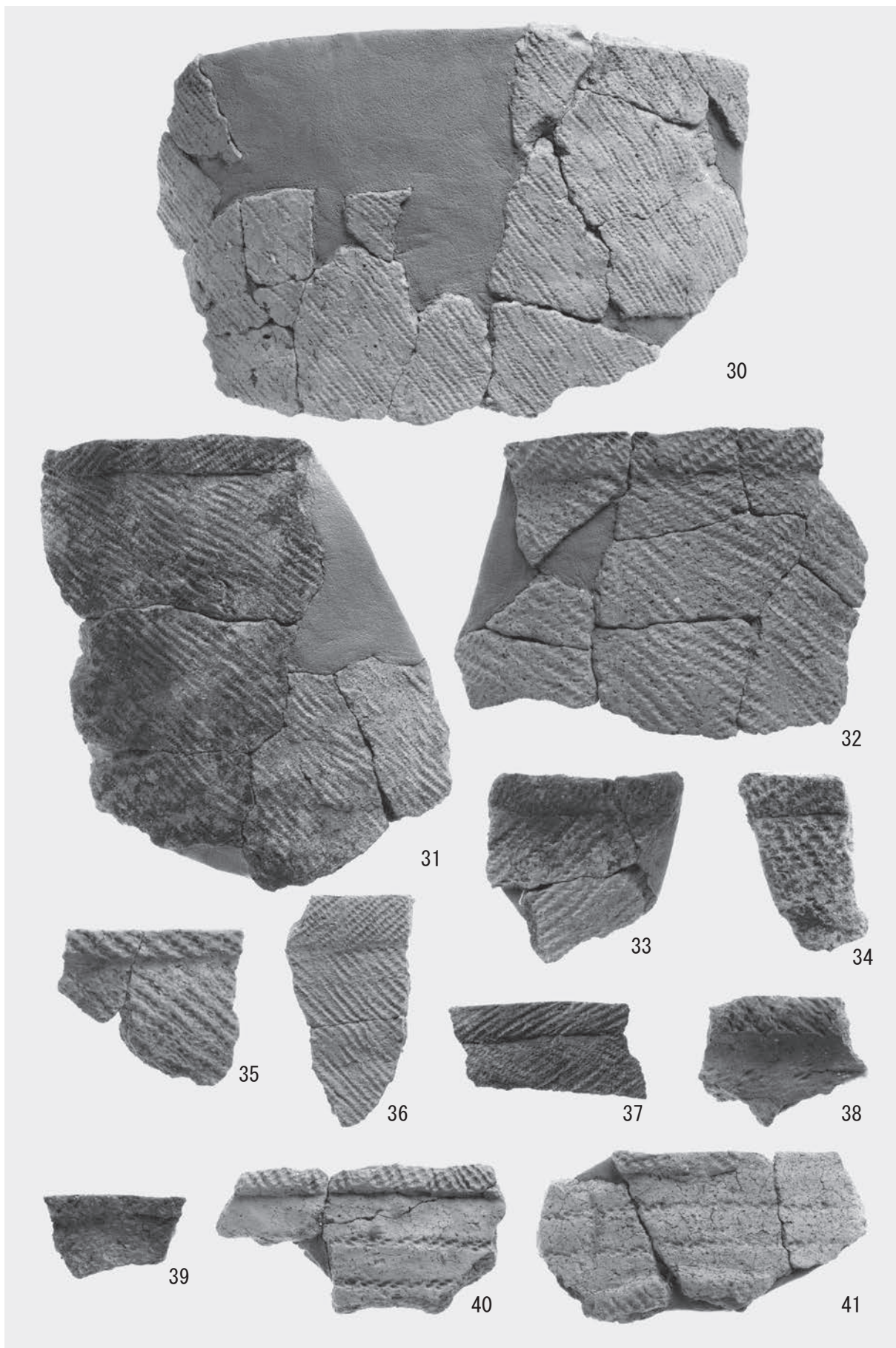
F - 1 4 土層断面 NE → SW



土器 (1)

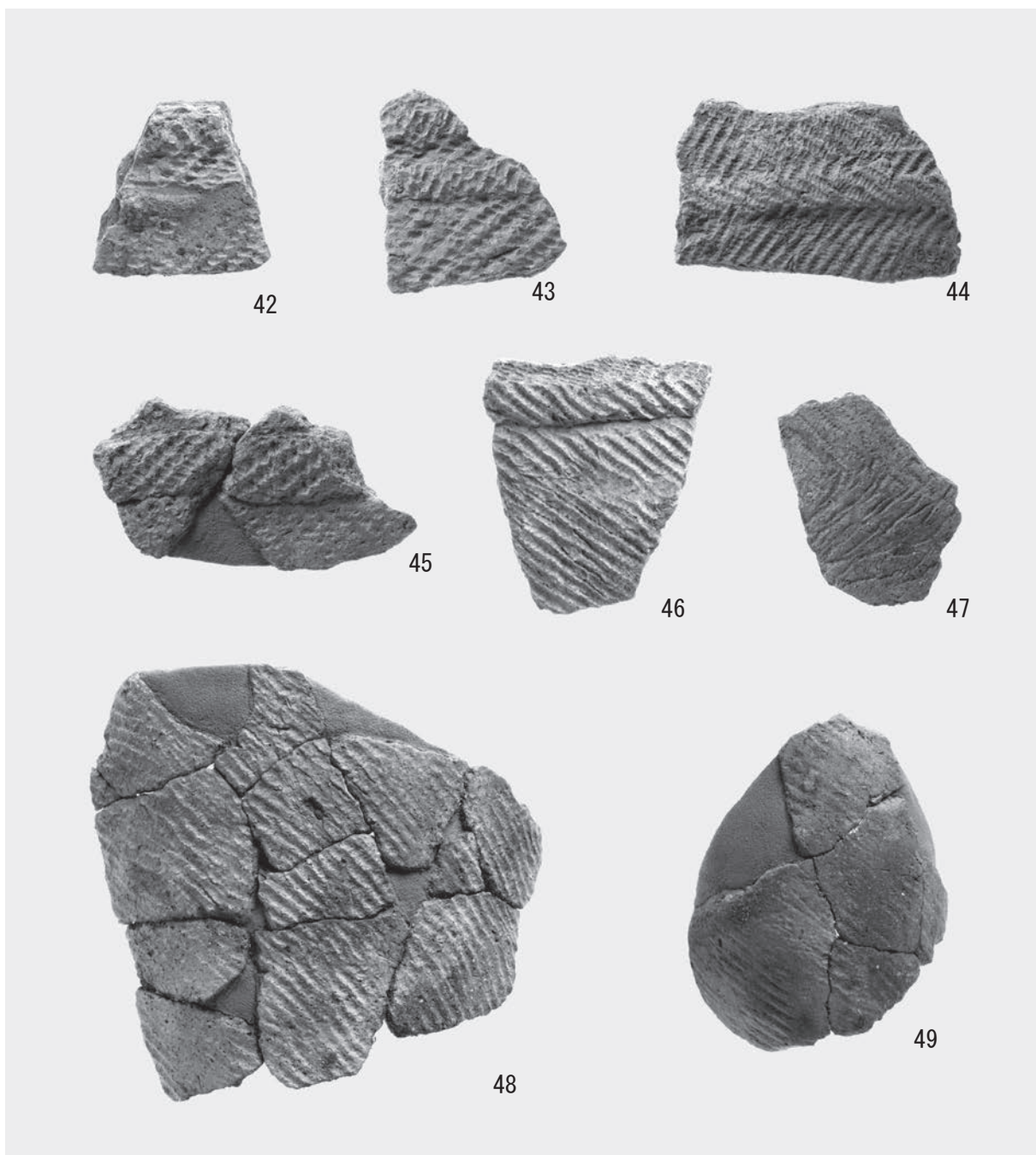


土器 (2)



土器 (3)





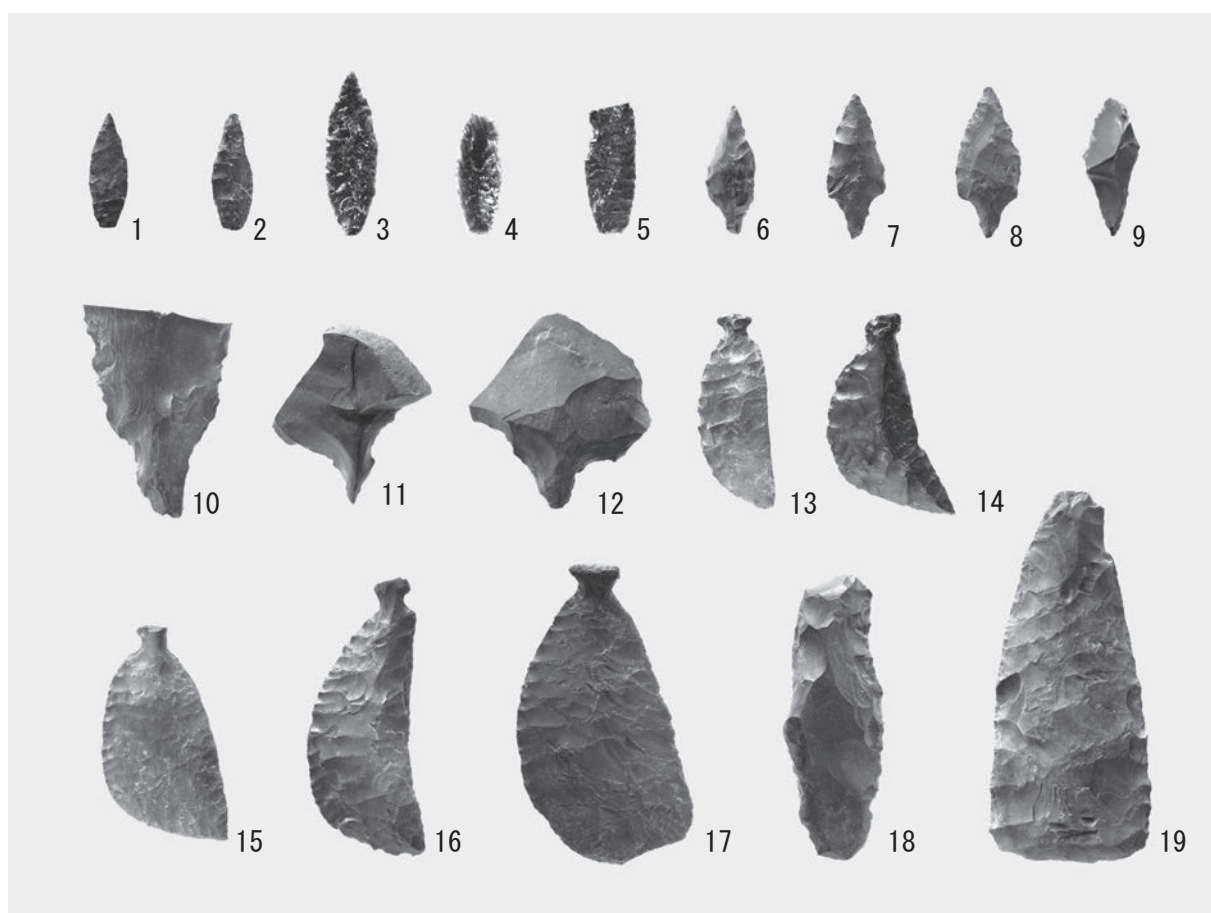
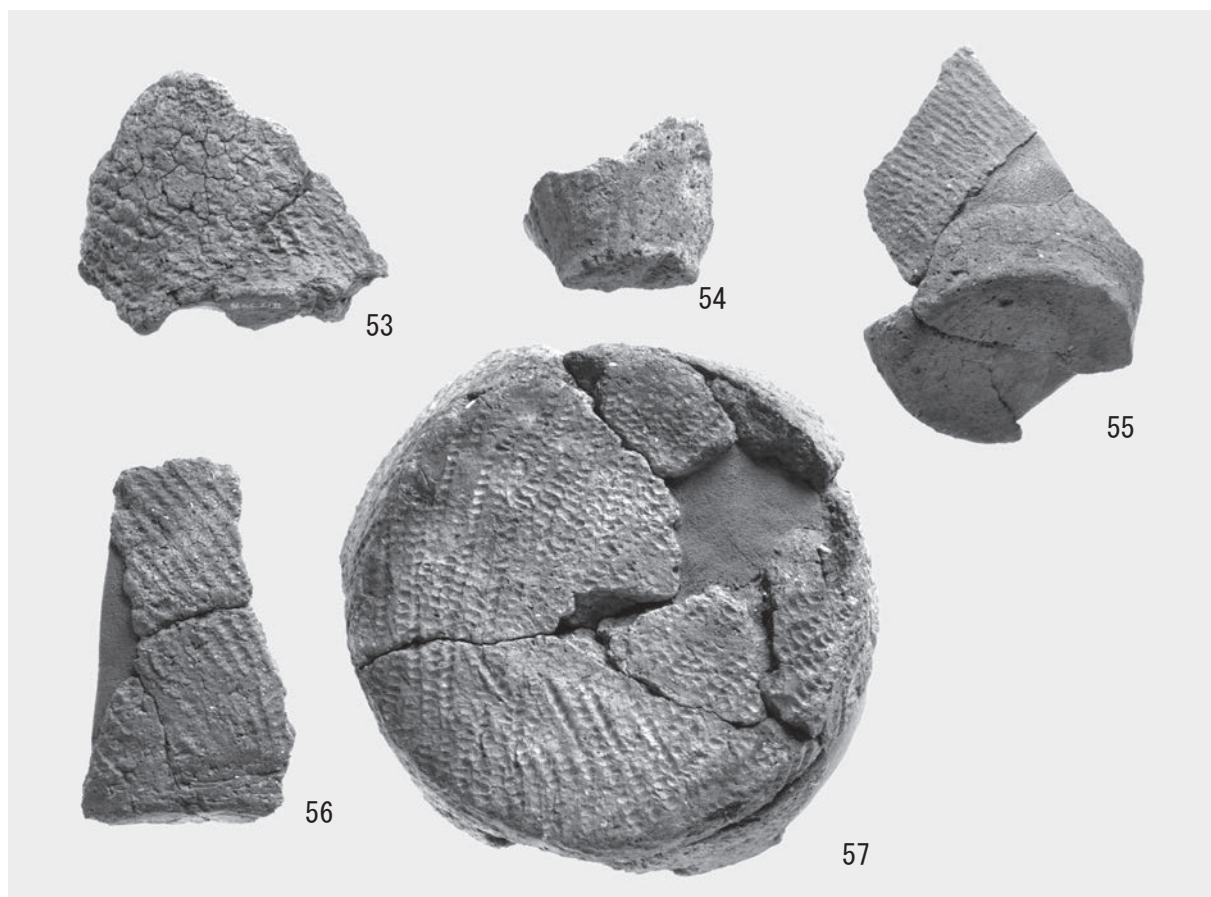
50



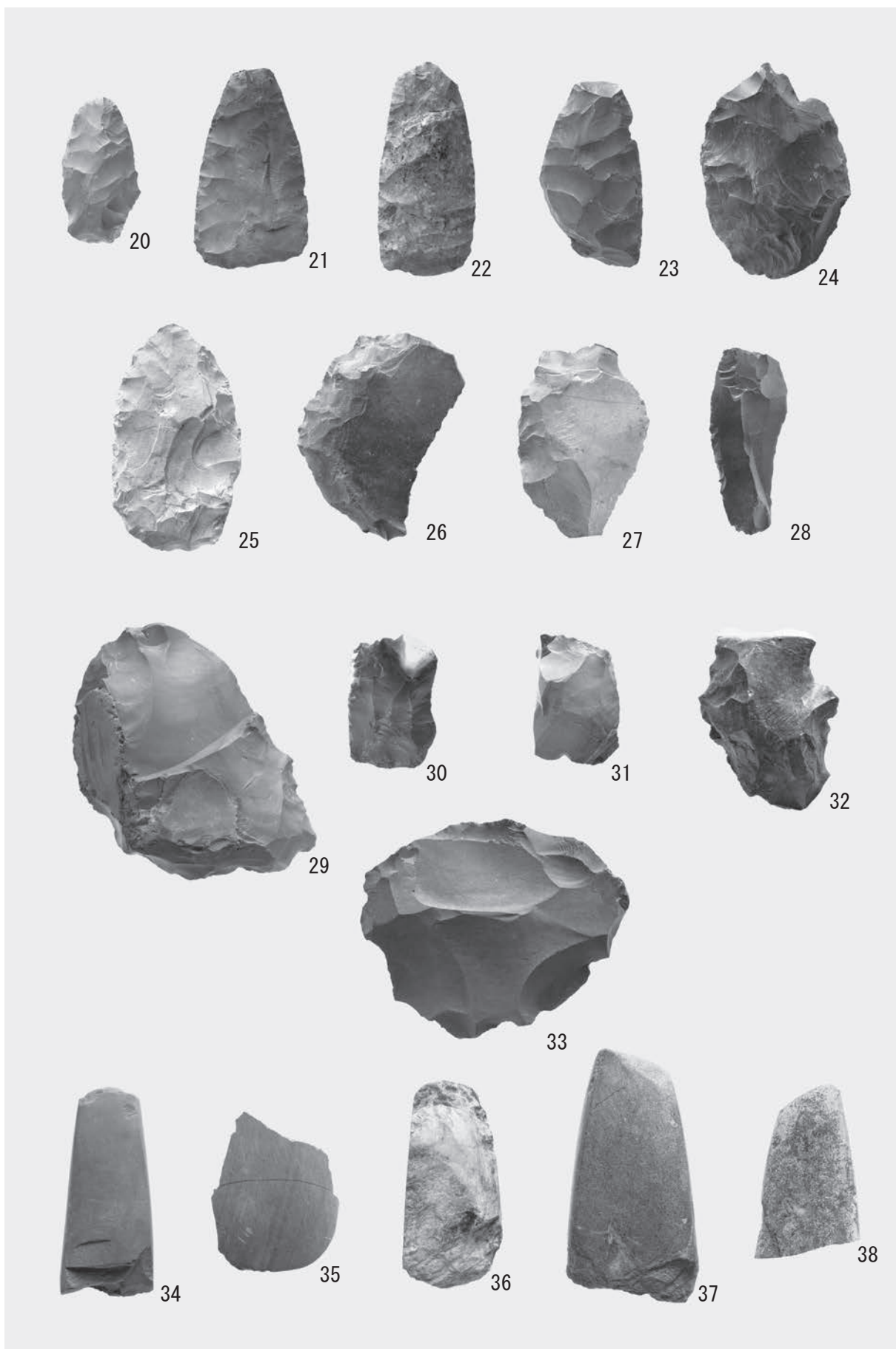
51



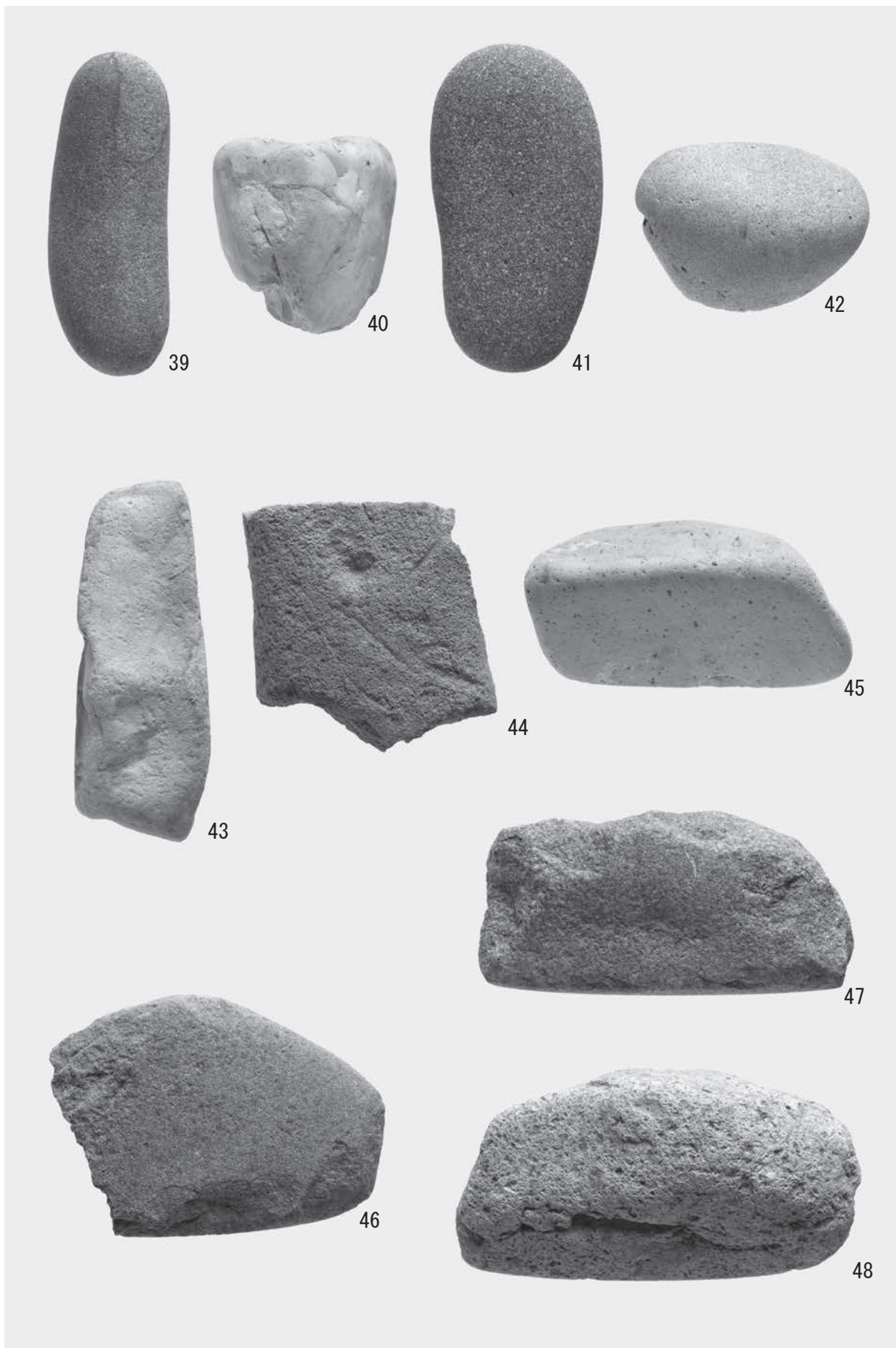
52



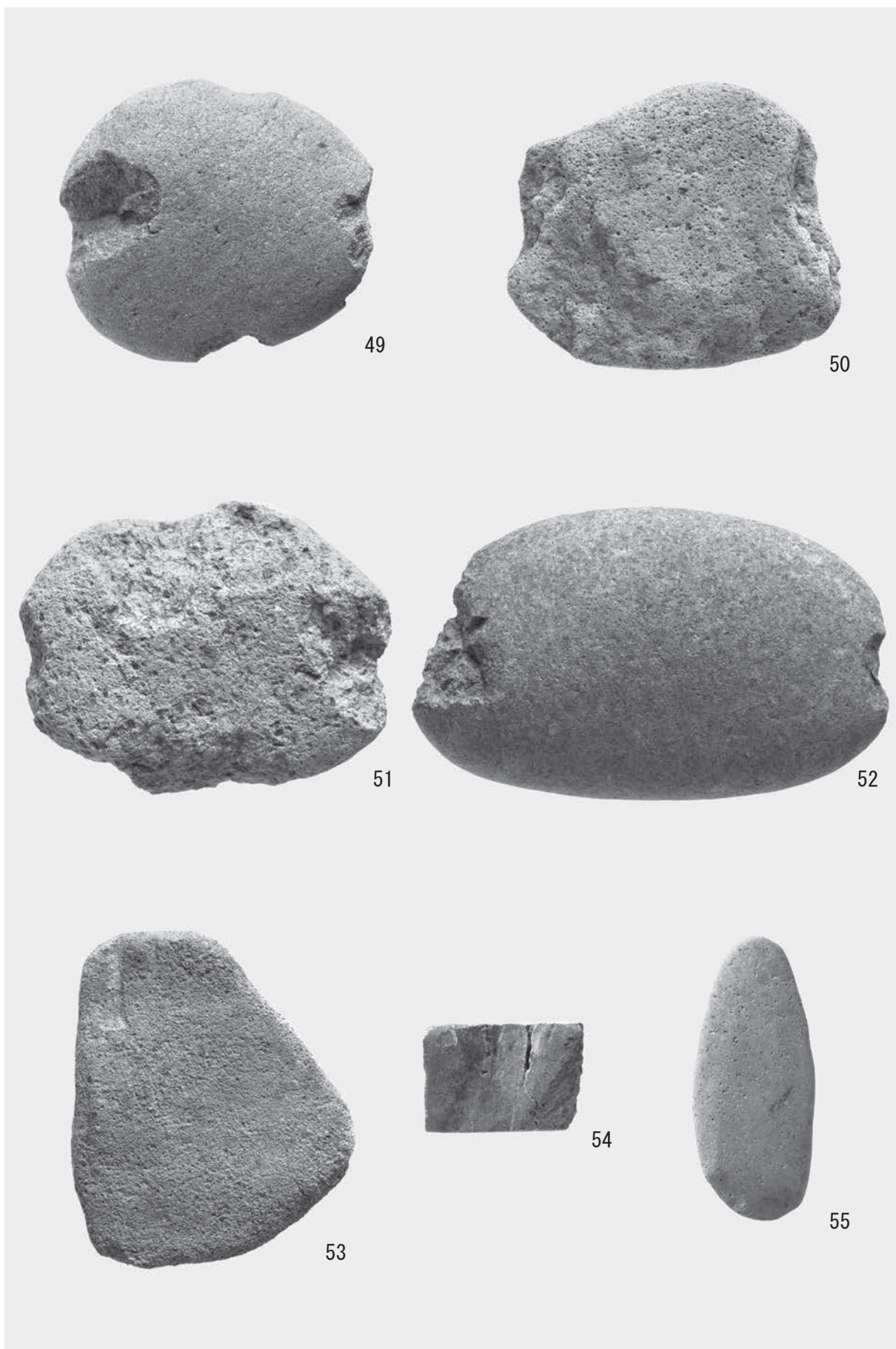
土器 (5) · 石器 (1)



石器 (2)



石器 (3)



石器 (4)



56



57

石器 (5)

# 報告書抄録

ふりがな	きこないちょう いずみさわろくいせき							
書名	木古内町 泉沢6遺跡							
副書名	高規格幹線道路函館江差自動車道工事用地内埋蔵文化財発掘調査報告書							
シリーズ名	公益財団法人 北海道埋蔵文化財センター調査報告書（北埋調報）							
シリーズ番号	第350集							
編著者名	土肥研晶・芝田直人							
編集機関	公益財団法人 北海道埋蔵文化財センター（ <a href="http://www.domuibun.or.jp">http://www.domuibun.or.jp</a> ）							
所在地	〒069-0832 北海道江別市西野幌685-1 Tel. (011)386-3231							
発行年月日	平成30（西暦2018）年3月29日							
ふりがな 所収遺跡	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
いずみさわ 泉沢6遺跡	ほっかいどう きこないちょう 北海道木古内町 あざにのたい 字二乃岱4-94・ 181・191・194・ 204・207	01334	B-05-61	41° 42' 32.36"	140° 30' 18.06"	20150701 ～20150717 20160606 ～20160621	3,079m <sup>2</sup>	道路建設に伴う記録保存
所収遺跡名	種別	主な時代		主な遺構		主な遺物		特記事項
泉沢6遺跡	遺物包含地	縄文時代早期後半		焼土		土器・石器		
		縄文時代後期前葉		土坑、焼土		土器・石器		
要約	<p>遺跡は道南いさりび鉄道泉沢駅から北へ約900m、現海岸線より約1km内陸の標高約40～50mの海岸段丘上に位置する。</p> <p>縄文時代のキャンプサイト的な遺跡で、検出された遺構は、縄文時代後期前葉の土坑1基、焼土8か所で、縄文時代早期の焼土6か所である。</p> <p>縄文時代早期後半と後期後葉の石器組成を考える上で、良好な資料が得られた。</p>							





(公財)北海道埋蔵文化財センター調査報告書 第350集

## 木古内町 泉沢6遺跡

－ 高規格幹線道路函館江差自動車道工事用地内埋蔵文化財発掘調査報告書 －

平成30(2018)年3月29日

**編集・発行** 公益財団法人 北海道埋蔵文化財センター  
〒069-0832 江別市西野幌685番地1  
TEL 011(386)3231 FAX 011(386)3238  
URL <http://www.domaibun.or.jp>  
E-mail [mail@domaibun.or.jp](mailto:mail@domaibun.or.jp)

**印刷** 岩橋印刷株式会社  
〒063-8580 札幌市西区西町南18丁目1番34号  
TEL 011(669)2510 FAX 011(669)2600  
URL <http://www.iwashashi-printing.co.jp/>  
E-mail [soumu@iwahashi-printing.co.jp](mailto:soumu@iwahashi-printing.co.jp)

